川柳雑誌

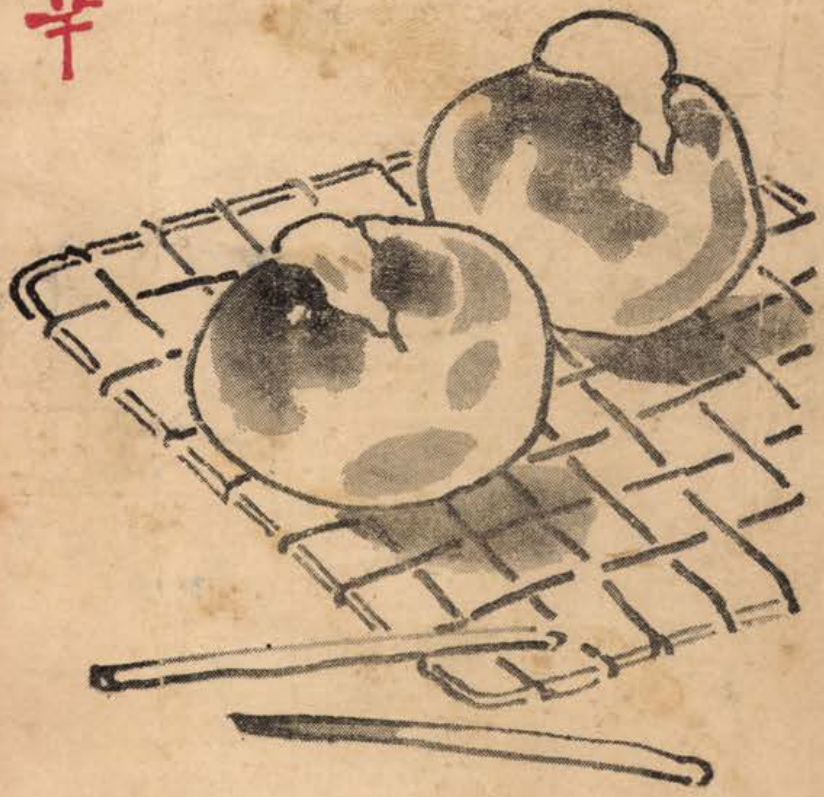
麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.308

三男作



新春號

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿八年一月一日発行第八卷第一號（毎月一回一日発行）
創刊大正十三年・通巻三百八号

謹・賀・新・春

新春号目次

（昭和廿八年）

題字……麻生 路郎
表紙……米田三男之介
人類は悲しからずや左派と右派……麻生 路郎…（三）
長島を訪ねて……延永 忠美…（三）
鼎談・三人は朗か……幽王・妄夢 梨里…（四）
電せん……政田 了一…（三四）
川柳に於けるデフオルムと云うこと…大西 野介（一三）
直筆の祭り……麻生 路郎…（二四）
東京大阪柳壇の交叉……品川 陣居…（一四）
私の柳友……満年・たゞみ・潮花…（二三）
川柳今月の歴史……福田山雨楼編（一六）
BKと短詩型放送……（七）
社の告知版……（一六）
★
不朽洞句帖……麻生 路郎…（三）
近作柳樽……麻生路郎選…（一六）
川柳塔……麻生路郎選…（八）
同舟近詠……諸家…（一一）
一路集「後姿」……市場没食子選（二〇）
「三等重役」……藤本満年選（一六）
各地柳壇……（一六）
柳界展望……（二五）
不朽洞会から……（二八）
編輯室から……（八）

本社新春句會

日時
一月十日（第二土曜）
午后五時半
場所
天王寺区下寺町二丁目バス停留所前
於 光明寺
兼題
「吉日」「要求」「白足袋」
席題・選者は当日発表
★当日、不朽洞賞カップ優勝者の決戦句会が行われる。
★例会全出席者を当日表彰する。
プロの詳細は省略。
★會費 五十円
——参会歓迎——

お手軽料理
30圓より
北極星スタンド
南区戎橋電停前

初日 三日

巳年の惠方は南海沿線
住吉大社
テレビが当る……
初詣ラツキーカード進呈
水間観音
水間駅下車
手本拾大法會（三日）
方違神社
浜東駅下車
企鵝に直り電車バス大増発
南海電車

大阪名菓
もなか民かまご
源氏の最中
百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民かまど本舗
電話㊻三四〇九

不朽洞句帖

麻生路郎

休戦の如く元日迎えたり

人類は悲しからずや左派と右派

年玉をやるに老眼鏡を掛け

ネオンの下を妬きつ妬かれつ　のし歩き

附録だけでエ、と　編輯侮辱され

書置もなく　料理人河豚で死に

人類は悲しからずや左派と右派

これは私の近作である。右でなければ左、左でなければ右だと云う考え方が決して正しいとは云えない。時に右でなければ左、左でなければ右である場合もあるだけである。

何故、人間は右と左に別れて常に争わねばならないのであろう。一緒になって人生を享楽することが、よりよく生きることではないのか。私は川柳によつて、人情味豊かなしかも朗らかな世界を生み出すことを夢みている。ザメンホフ博士はエスペラントの創始によつて世界の平和を夢みていたが、私にしても世界の隅々まで川柳と云う短詩の力で人間陶冶が可能か、不可能かぐらいなことは知りぬいていて、しかも、その夢を捨てかねているのである。せめて、地球のある部分に川柳のよさが判つて呉れる人間を創つて、その線の中でいゝ人生を送りたいのが私の念願である。

人類と争闘は宿命かも知れないが、ある世代、ある地域、ある人達の間で、人間味の豊かな美しい平和な世界を現出させることは必ずしも不可能だとは思えない。私にとつてそうした不可能を可能にするカギは川柳であるが、このカギは誰にでも役立つとは限らないのが遺憾である。

世の中には真に川柳のよさを解せない人が多い。それ等の人達は所謂無縁の衆生であるから、微力な私などにはどうすることも出来ない。しかし、川柳が判つて呉れないそうした人達を決して憎しみの眼で眺めようとは思わない。いつかは判つて呉れるであろうし、最後のカギは科学ではなく愛情だと私は思つている。

近ごろはよくストが流行る。お互に自己の権利を主張して一歩も半歩も譲ろうとしない辛じて妥結が出来たとしても、常に双方ともに不満の妥結であるらしい。彼等はストをすることによつて未来永劫に、幸福を見失うことに気づかない。生きるための闘いがストだと云いもし、考えもしていることに大きな錯誤のあることを反省して見る必要がある。例を電車のストに採る。どちらにも云い分はあろうが、どちらにも自己に都合のいゝことしか主張しないのではないか。しかも、一歩も譲ろまいとして力味返つているとしか見えない。第三者の迷惑などは一切問題にしていないように見える。結果がよかろう筈がない。私はストが始まると、いつも夫婦喧嘩を想像する。

夫婦喧嘩ばかりは大ビラにやられてはハタが困る。何ンの罪もない子どもの渋面が目に浮かぶ。時にはソバ杖を食つてなぐられる。子どもこそいゝ迷惑である。その子どもの将来が案じられる。そのハネ返りが、それ等の夫婦に来ないとは誰れが保証出来よう。労資の対立は相互の愛情の欠如である。仕事に対する愛情の欠如である。時間の販売制度には愛情がない。この点労基法は考慮さるべきである。私は常に仕事を愛する。私の辞書には八時間労働と云う文字はない。そこに生きる道が拓けると信ずる。真に生きるためのカギは愛情である。そこには左派も右派もない。鳩山対吉田の問題も生じない。大きく云えば米ソの対立もない筈である。

——麻生路郎——

鼎談 三人は朗か

木下幽王
福田妄夢
麻生梨里

★★★★★★★★★★★

梨里＝お忙しい処をどうも有難とうそれでは始めることにしましようか。

妄夢＝今日のテーマは？。

梨里＝何もテーマと云つてないので、まあ四方山話でも……今度は何の年？。

幽王＝巳です。

妄夢＝今年は住吉さん賑かなことですやろ、巳さんを祭つてますな。

梨里＝新年の句も戰前、戰時、戰後と隨分変りましたね。

凡聖一如元旦の心知る　（路郎）

福壽草松にしたがひ候かしこ　（葭乃）

今年こそと起ち上つたがもう櫻　（豆秋）

など、やつぱりのんびりしてますね。

妄夢＝それが戰時中になると

正月の餅はあろうがなかろうが　（満潮）

戰時中はお正月どころではなかつたのか、あまりよい句がありませんなア。大体こう云う物資不足のお正月が、多いようです。

幽王＝終戰の翌年に

比島より遂に歸らずお正月　（好郎）

と云うのがあります。終戰後にしても新年吟らしい良い句は少ないですね。

妄夢＝正月の句に限らず前書の付いた句には良い句がありませんなあ。

梨里＝前書と云うものは結局十七音字の中に詠み込まれていないといけない訳ですからね。

幽王＝前書をつけねば意味が分らんと云う句は未完成ですからね。

梨里＝例えばですねえ……私は人を褒めるのが下手で困るんですけど……

幽王＝遠慮せんとけなしたらいゝ。

妄夢＝そや〳〵一つこき下しまへうか。

梨里＝一寸今、合本を開いた処にあつたので、例えに上げて悪いですけど、「人生観」と云う前書で「さぼてんの平凡さあり生きている」（桃水）この句は前書がなくても分る句ですけれども、前書がなかつたら只自分の現在の生活のありのまゝを句に纏めただけのものゝ様で、これがこの人の人生観であるかどうかはあまり判然としない。従つて前書が句にプラスされていることは間違いないと思います。また、「砂糖不足一人一斤」と云う前書で「砂糖屋を出れば夫婦だ笑い合い」（ライト）これは戰爭で物資が不足して來た頃の句ですが、前書がなかつたら何のことか分らないと思います。つまり十七字で云い切れない部分を前書として外へ出したと云うことになるでしょう。少々の字余りはあつても、あくまで十七音字中心で総てを表現すべきだと思います。前書がなくても分る句なら前書は不必要ですしね。

妄夢＝結局前書の無い句の方がよろしいなア。

幽王＝路郎先生の句に「聖徳太子の像に題す」と云う前書で「一ト握りあゝ人生は和に如かず」と云う句がありますが、前書があつても、なくてもやはり良い句はよろしい。前書がなくても立派な句でなければねえ。前書で以て説明すると云う事は卑怯なやり方ですね。

妄夢＝だから「〇〇氏に贈る」と云うような前書はよろしいが前書が句を説明してはいけないと思いますね。

梨里＝近頃「お好み燒」が大へん流行してますけど、あれは戰後派の喰べるものですね。

妄夢＝戰前もありましたで、「お座敷お好み燒」というのがね。あれを喰べる人の顔は眞劍ですな。丁度猫が鼠を狙うようにね　（笑声）

梨里＝あれね燒くのに時間が掛るでしょう。長いこと話をする時なんか、お好み燒屋に入つたら安くつくでしょう。　（笑声）

妄夢＝燒きながら喰べると云う外に何やらべた〳〵塗つて、生産者であり、消費者であると云う処が面白いのですな。

幽王＝これも矢張りパチンコが大人にとられた様に、今大人にとられつゝある処ですな。

梨里＝あれ、中に色々入つてるでしょう。豚や云うて注文するのがきまりが悪うて（笑声）「何にしましよう」云うて聞かれるとヒヤツとする。

妄夢＝此の頃は「主婦の友」などにお好み燒でお客をもてなす法、などと出てましたが、次第に高級になつて、家庭に入りつゝあるようですな。

梨里＝処で幽王さんは何時から川柳を始めはりましたの。

幽王＝昭和十五、六年頃でしたか。

妄夢＝そうです。そうです。結局同期生が三人寄つた事になりますなア。

梨里＝そうですね。私も「川雑」に発表し始めたのはその頃だと思います。最も八才位の時から眞似事位なものは作づていたらしいですけど……。

幽王＝丁度学生時代の生意氣盛りでね――。

妄夢＝生意氣盛りでも川柳に走つたと云うとこは殊勝なとこがおますな。

幽王＝丹路さんの句が好きでね。夢中で眞似たものでした。本社句会へ初めて丹路さんに連れて行つて貰つて天に入り、びつくりして雅号も云えず、丹路さんに名乘つてもらつた事は今でも忘れられません。妄夢さん川柳に入られた動機は？。

妄夢＝動機と云うて別にないけれど、けつたいな具合に入つてしもたんでつけどな……。私がね、一番最初に知つた人は魚住満潮さんでその関係で「川雑」の方へづつと……。

梨里＝丹路さんも満潮さんもいゝ作家やから御弟子さんがいゝのは当り前ですね。

幽王・妄夢＝ウワーッ。

妄夢＝僕らは、人生五十年として、半分は戦前派でアバンには懐し味があり、又アプレに対しては敵視する氣も起りまへんね。正月にしても四十才や五十才の人の氣持も解り、アプレの「正月て何や」と云うような氣持も判りまんね。

幽王＝そりや同感ですなア。

梨里＝私も同感、私等は丁度アプレとアバンの中間になるでしょう。けどもアプレと云う言葉は若い人を批難する場合に使うから、そう云う意味で私は自分では矢張りアバンやと思つているんですけどね。然し一般にアプレとか アバンとかつて云いますけど、私は戦後に生きている人は全部戦後派だと思つています。六十才は六十才の戦後派、三十才は三十才の戦後派でしょ。大体年寄りでも昔の年寄りとは大分違うんですからね。

幽王＝もう終戦後八年にもなればアバンもアプレもないわけですよ。私の句に、

二十代フフンそうかと馬鹿にされ

と云う句がありますが年寄りの理窟つぽいのが腹の立つ時代がありましたが、最近は大分心境も変つて來て句を作る場合でも八ツ当り的な句は、そう出來なくなりました。

妄夢さんは大変寡作ですけれど、何か神秘的な句を詠まれますが、何か信念をお持ちですか。

妄夢＝えらいむつかしいことになつて來ましたなア。別に私は信念やとか、こう云う風な句を作りたいとか云う目的やとか、句の出來上りを意識した事はないのです。

梨里＝そんなら自然に湧いて出るわけですね。そう云う句の方が本当はいゝのでしようね。

妄夢＝川柳の作りかけの最初は幽王さんが云われたように自分の好きな作家の句風に眞似ようとしたり。それに似た句が出來る事を目標にしたわけですが、そう云う風にして作つてもそれは所詮眞似事であつて満足したものは得られんわけですな。

幽王＝大体私等の年配の者は皆理窟つぽい句を作りたがるものですけど、梨里さんの

女なる悲しみおんな酌をする

と云うような句を見ると同じ年配でも、してやられたと云うような氣がしますね。妄夢さんどうですか。

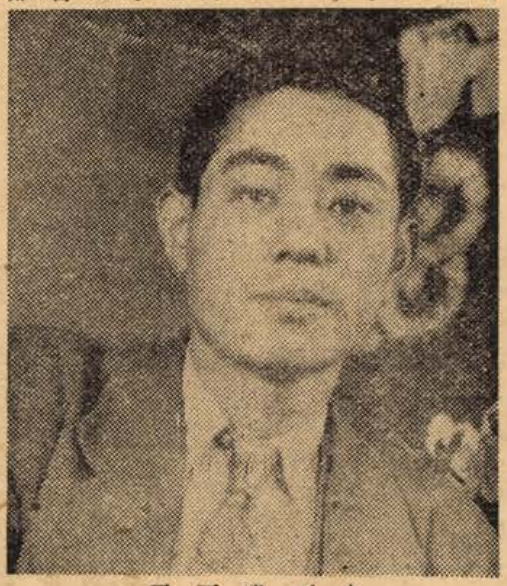
妄夢＝私もね、この梨里さんの句が出た時に丁度豆秋さん処に居つたのですが、私は勿論、豆秋さんもこの句には参つたと云うてはりました。

梨里＝困つたな。困つたな。

妄夢＝あんまり名作にふれると句は出來ませんね。豆秋さんとも云うてましてん、こんな句を出されると励まされるよりも意氣消沈してしまいますね。

幽王＝僕なんか、先生や先輩の句にいゝのがあつても当り前と云う氣持で別に何とも思いませんが、同期位の作家の句に物凄く競争心を感じましてね。

梨里＝本当は人に褒められるような句はまぐれ当りに出來た句なので、褒められたからと云つて又そんな句を作ろうとしても出來ないし、それにこだわると益々出來なくなつて困るんですが、そんなこと



木下幽王君

別宴 旅館

つなや

大阪市南区長堀橋筋二ノ二一
（道頓堀日本橋北詰西側）
電話 ㊥7238

はありませんか。

妄夢＝確かにそうですな。

梨里＝もと〳〵心境も段々変つて行くんですから前の作にこだわつたら駄目なんですけどね。川柳は或る程度性格の激しさがある方が作りよいように思うのですが、私はこの頃大変穏やかになつたのか（笑声）

幽王＝ほんまかいな（笑声）

梨里＝とても作り難くなつて困つているんですよ。

幽王＝確かに句が作り難くなりましたね。私の作句ノートの表紙に大きな字で一日一句と書いてあるのですが、実際に句が出来る時には十も十五も一ぺんに出来てその他の時は幾ら一生懸命になつても出來ないんです。矢張り句会や柳書にもつと馴染まねばいかんのだと思いますが、その点梨里さんは川柳の中で暮していられるわけだから得ですね。

梨里＝そんな事ありませんわ。雑用ばかりで句会の日でも句会に行くまでバタ〳〵しているし、句会に行けばべつたり用があるので句を出すことも少ないし、却つて駄目な様に思いますよ。川柳塔の締切も「あゝ締切だな」と思うだけで又次の締切が來てしまう。ふゝゝゝゝ。

妄夢＝話をもとに戻して作句に対する信念を梨里さんに……。

梨里＝私は信念は持つているんですが、その私の信念に叶つた様な句はまだ一句も出來ていませんので一寸恥しくて公表しにくいのですよ……。

第一に誰にでも作れる様な句はいけない。自分にしか作れない句でないとね。それからもう一つ何時も思つていることは川柳は詩でなければいけない。行き過ぎて川柳の特色を失わない程度にね……。私は女は女としての立場から作句すると云うことを第一條件にしています。女の人は世間が狭いので男の人と同じ様な句境を持てば必ず負ける。（笑声）所謂川柳には穿ちの句が多く、又穿ちは川柳の一要素として捨てられないものだと思うのですが、私等の様に世間が狭いと穿ちの句は非常に作り難いし、作つてもよい句は出來ません。

幽王＝それはね。僕達が女の人の心境を詠めないのと同じで世間の廣い狭いは問題じやないのと違うでしようか。

福田妄夢君

梨里＝兎に角私には穿ちの句は出來ませんわ、例えば梅里さんなんか穿ちのいゝ句を作つて居られますけどね……。

妄夢＝それでえゝのと違いますか、穿ちのうまい人は穿ちの句を作り美しい句が得意な方は美しい句を作り、その作者その作者が別に意識はしていないのでしようが、そのカラーの句が出來て行くのですよつてにね。私は川柳、俳句、詩等の何にかゝわらず発見でなければならぬと思うんです。自分が発見したと思つても既に発見されて居たかも分らんし、これは発見されて居ると思つても、未だ発見されていない句であるかも分りません。ですからその選択は先生や先輩にして頂くとして兎に角発見して行きたいと思うんですけどね。

梨里＝総て創作はそうでなければ價値がないわけです。だから本当に價値のある句と云うものは、そうざらに出來るわけのものではないと思います。例えば俳句の蕉芭にしても作つた句が皆よいと云うわけではなくて、本当によい句は沢山残された中の何句かに過ぎないと思います。だから私等は死ぬまでに一句残せるかどうか……。厳密な意味での発見と云う事になれば、まだ誰も感じた事のないものを感じた場合でなければね。又それを表現するためには、鮎美さんの柳魂じやないけど、全然新しい言葉を創り出さなくてはならないでしよう。

幽王＝発見と云う言葉が何だか氣になる様に思うんですが要するに感受性の問題ですね。兎に角十七音字の範囲内で表現しなければならないわけだから着眼力の鋭い人がよい句を数多く作れると云うことになる。我々ももつと〳〵あらゆる勉強をして情操を高めるように努力しなければならないと思います。

梨里＝あまり常識的になると句は作れませんね。大体人間が思想の固まらない時の方がよい句？力のある句が出來ると思うんです。所謂〃長いものに巻かれろ〃と云う様にならない内がね。

妄夢＝そうでんな。生きていく上に於ては、あらゆるものに妥協して行く、それこそ正月を迎える度に妥協する。妥協しなければ生きて行けない。従つて句にも妥協性が出て來るんですな。

梨里＝そうか知ら？妥協しなければ生きて行けないかどうかは知らないけど……。

妄夢＝そりやあ妥協しなければ絶対に生きて行けまへん。たゞその妥協する程度の問題だと思う。

梨里＝妥協せんでも生きては行けると思う。

妄夢＝いや絶対に生きて行けまへん。まあ一寸も妥協せんと行けるのは三才位までですな。（笑声）三才位までは自分の思うがままに出來るが、もう幼稚園へ行く位にな

れば社会生活に適合せなあきまへん。

梨里＝私はね妥協はせんでも生きては行けると思う。たゞ自分の意志を何処までも通すのが面倒臭くなつて來るだけ。だと思うんです（笑声）

妥夢＝と云うことは詰り妥協したのと違いますか（笑声）これは僕だけの考え方ですけど、僕は一人と云うものは人間と違うと思う。僕と梨里さんの間にあるもの、僕と四、五人の人の間にあるものが人間だと思う。自分と第二者、第三者と妥協せざるを得んようになる。絶対に妥協は必要です。

梨里＝面倒臭くなつたと云うことは妥協したんですよ。けど生きて行かれへんから妥協したのと違います。（笑声）

幽王＝新年早々喧嘩したらいかんがな（笑声）又新しい年を迎えたわけですが我々の年配は戦争――終戦のどさくさと、貴重な体験を経て來てる訳ですから我々でなければ詠めないと云う材料が幾らもある様に思えるんです。

梨里＝けどね戦争――終戦と云うことは我々でなくても皆経て來ているわけでしょう。

幽王＝然し今の五十才、六十才になつた人が経た経験と我我のつまり青春時代を弾圧されて來た……最も貴重な時代を戦争――終戦の間に過して來たのとは非常に違うと思う。我々はそう云うことに大きな憤りを感じるわけです。それに対する不満とか、反省とかは何時迄経つても忘れる事は出來ません。それにも拘らず川柳の上でその叫びを上げた我々の年代の者がないのです。今からでも遅くないから我々が云わねば云う人がないと思うのです。

妥夢＝私は過ぎた事は云いたくない。若い人がそんな事を云うのはよい事だけれど、過去の不満を句にするのもよいが、それよりも、もつと現実的に若さのある句を作りたいのです。過去の貴重な時間を費したとか、若さを犠牲にした不満とかを云うのも若さかも知れませんが。

梨里＝然し此の事は我々でなければ詠めない訳だから我々にのみ與えられた課題だと云う訳でしょう。若さを詠むと一口に云つても若さつて何だと云うことですね　まあ若いと云うことは未來が多い訳ですから未來に対する希望を盛り上げた様な句も若さのある句だと云えるけれども、それよりも不満の爆発と云うようなものゝ方が力があるんじゃないか、又それが若い人の特徴じゃないかと思います。

妥夢＝そやからですね。喜怒哀樂にしても、若い世代でなけりや出來ない句がありますね。それを大いに生かさねばなりません。

梨里＝若い人はあらゆる点に一方的だから自分の考えで世の中を割切ろうとする処に不平も不満も湧いて來る。思想的にも人間的に何かゴロ〳〵としたこなれないものを持つているでしょう。これを形式や何かにあまり拘束されないで詠まれたものは表現の上手、下手は別として案外迫力を持つていると思う。過ぎた事は云わんとか云うことになると大分悟つて來ている。（笑声）

幽王＝矢張り一番兄さんやから……。

妥夢＝いや僕は先刻意味を取り違えてたから詠まねばならんと云うように……我々でなければ詠めんと云うのなら話はわかつてるのですよ。ただ僕は他の事でも若さは詠めると云うだけのことで、まだ悟る処まで行つてまへん。

幽王＝結局戦争から終戦にかけて我々若い人が喋る機会もなかつたし、喋らして貰えなかつたわけですね。色々な意味でね。だから何か云い忘れた様な穴のあいた氣持を持つてるわけです。これをくよ〳〵する意味でなしに年寄りに聞いて貰いたいと思う。今年はそう云う方面へ足を入れて見たいと思つてます。

梨里＝川柳は大衆の文学だと云いますが、大衆に迎合してはいけない。自由に潑剌と自分の思う処を吐くんですね。

妥夢＝句では妥協をせぬことですなア。

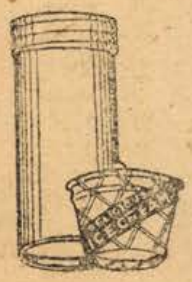
（春巣筆記）

麻生梨里さん

BKと短詩型放送

▼BKでは従来聴取者文芸を「市民の時間」に放送して居たが十二月からは独立して「趣味のしおり」と題し、毎週日曜の朝の九時十五分から三十分迄放送することになり、第一週は新たに詩を加え、第二週は川柳、第三週は短歌、第四週は俳句の順で行われる。第五週のある場合は文芸時評などを放送するとのこと。従つてBK川柳の会の放送は毎月第二週の日曜の朝に放送することに変更された訳であるが聴取者にとつても川柳人にとつてもよろこばしい変更である。

酒販用 紙コップ
食堂用 紙製品一切



アイスクリームは
堅牢で衛生的なこの容器で

特殊紙器工業株式會社
フタバカツプ株式會社
大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話 天下茶屋 (66) 2802 2803

川柳塔

大阪市　中島生々庵

死にやはつたそうで同病氣がつまり
精魂もつき未亡人髪が伸び
大群をなせば雀の勇敢な

池田市　戸田古方

貧乏がおもろうなつて叱られる
付き合ひに描く絵へ絵具買うてくる
船場へ就職たんと嘘習ろといで
本心をいうた途端に馘になり
令夫人これも搾取の指環かな

尼崎市　水谷鮎美

仇花のぽろりと落ちしまゝ惚れる
初対面常藥をのみ失礼し
若返りちら〳〵見える灯がうれし
行商の坂登りきりひと儲け

大阪市　市場沒食子

自己宣傳おごつてもろて聞いて居る
能率の上らぬ男居残りか
治つたで誰も誤診と信じ得ず
極樂えゆけぬ仕事に執達吏

横浜市　福田山雨楼

電産スト亭主が市場籠をもち
古橋も遂に上つて甲羅干す
戰つておれば中國日が暮れる
吉田さんもう大勳位ほしい頃

ホノル、市　内藤草一郎

置き酌ぎをして身の上を語り継ぎ
ひるの猪口鯉のはねたへ振り返り
酌をして欲しい妓は寄りつかず
飽かれまいとするサービスもいぢらしい
少し熱く致しましたと風邪に酌ぎ
無意識か意識か指輪の手を上に
眠いわよ謎であつたと後で知れ
酌ぎながら小声になつて「しばらくねー」

大牟田市　高田抱逸

飲みに來たのが退職金を聞きたがり
金融をやつたと帰へして酎にする
赤い羽根背廣着た日に買わされる
ストのビラ会社辞めても氣にかゝり

米子市　三鴨美笑

隣だと放てもおけぬ家出の娘
奥様に済まないからと放り出され

布哇　白砂旋風

不運とは腹の立つ日に寄附が來る
亡びゆくカナカ踊れば月が出る
信ずれば强情を張ることもあり

大阪市　須崎豆秋

あゝ疲れちやつたと桐の葉が落ちる
オーライで動き出したる靈柩車
猫も風流池の雲見てる
十五秒でお元日ですNHK
元日の計パチンコはもう止めだ

大阪市　正本水客

遠足のひとり走つて池が見え
八階のビル目の前に出來上り
自轉車を玄関へ入れて今日終る
血色のいゝ停年の友と呑み
男世帯へコスモス伸びるだけ伸びて

大阪市　黒川紫香

はつきりと云へる立場の煙草の輪
山盛りの飯でうれしい故郷の灯
未亡人遊び相手が又変り

大阪市　丸尾潮花

学友もチヤン〳〵コ着る歳になり
先斗町舞妓の襟も秋になり
墓石はつめたく萩の葉がこぼれ
博愛を衆におよぼす金もなく
大阪の恋を銀座でおさへられ
アプレ泌み〳〵小春の恋がねたましく
袖口を胸で合せて女待ち
屋台店こゝにも小さい資本主義
金借る間月に待たせる人があり

大阪市　北川春巣

吊革を両手に握る程に酔い
素人のなすびは十一月もなり
菊自慢天然色で撮つておき

奈良県　尾崎方正

政見を聽いて一票引込める
政見がどうであろうと賃仕事
赤い羽根賣りつけられた乘り遅れ
年甲斐もなく惚れた弱身を見せる晩

下関市　櫻川不水

船乘りの誇に天と水があり
大時化を乘り切つてからの酒の味

カルカッタにて

沓磨き沓に負けない艶を持ち

大阪市　武部香林

左前日蔭時計でことが済み
遠縁は位牌の話からはじめ
手を放す医者ラムネでも飲めと云い
号外を持つて外交戻つて來
行つて來るわとアブレの娘は嫁つた
大阪市　水谷竹莊

復讐をするわと女におどかされ
一人して怒つて見ても始まらず
飲んだとも云へずすられた事にする
下関市　弘津柳慶

髪の毛も薄くなつてる模範工
脈があると見てか行商荷を解き
手拭を宿の手摺に忘れて來
下関市　國弘半休門

今度來る汽車に愛人乘つて來る
マダムですと和服の女突き出され
秋深かまりぬと駅長室焚火
大阪市　吉田斜水

やかないで君も恋愛したらどや
屁理窟を聞いて下役引き下り
パチンコの飴かと四つの子に聞かれ
パンツまでお古次男はあわれなり
消火器にほこりが貯る有難さ
英字紙が眼ざわりになる満員車
ハイヒールコツ〳〵〳〵と裏長屋
大阪市　山口秋花

横たはるだけを喜ぶ親となり
母の眼に雲黄昏の色になり
尼崎市　小林文月

断水に神様の水採りおくれ
次男坊帰れば波長また変り
男女同権シャツのボタンを一つつけ
札幌市　山根白星

男たるもの婦人科で浅く掛け
処女さらばばちんと熱海二枚切り
パンパンがはやりナイロンがはやり
泥酔の動かすなりぬ残置燈
領收書作り直して社用族
大阪市　福島正則

酒臭いシートこらえる初詣り
正月と云うのに肩のこつている
商人になり切り元旦からのケチ
大阪市　富岡淡舟

サボテンの如き女で手が出せず
何んの日かラジオはお経あげている
愛妻家と云はれ養子とも云はれ
山口県　長野井蛙

在職三十五年の感想
古草履まだ脱ぎ切れず鼻緒すげ
一人採る試験へ半日順を待ち
車掌にも家出と知れる娘のそぶり
圧し付けた石を雑草もう包み
片意地を通して淋しい椅子に朽ち
大阪市　上田春柳

警棒の先でギンシャリつゝかれる
ぶつちやけの今日の希望は夢と去り
岡山県　丸山弓削平

蟷螂に似て矯風会幹事
稲刈の鎌に蟷螂抗う氣
岡山県　直原七面山

嫁く友へ妬みも添へた祝品
娘には娘の希望三色スミレ播く
ひき蛙動きませんよと言う構え
飲み度い妓スツスツスツと來て座り
大阪市　西森花村

やつとミシン買えば洋裁熱が醒め
ぜんまいが切れたか女泣きやまず
何もせずじつとしてたらよいレール
舗道には舗道の音で義足行き
鳥取市　河村日満子

秋雨もよし社用族酔ひつぶれ
晴天白日十一月三日酔ひに酔ひ
電源ストありやりや家庭のが消えず

妻病む
まだ二十年は死なれませんと病む妻の
病む妻にやさしくすればなほ泣いて
兵庫県　岡代尋四

露出狂らしい娘のふえたこと
忘れてた様にキッスをして帰り
兵庫県　家沢蕎花

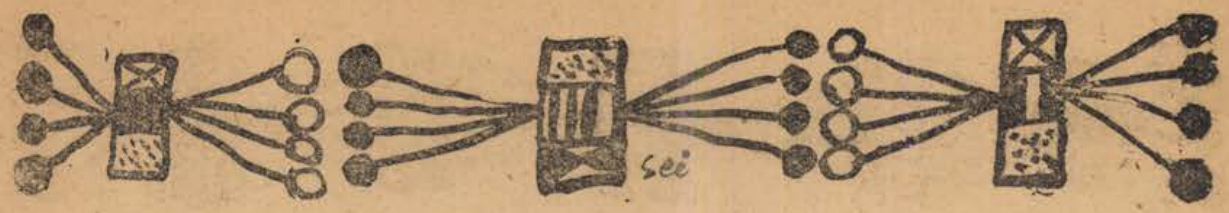
坊主持ち女の番になつて止め
夫婦喧嘩に呑まれた様に子が默り
虫眼鏡よつぽど本が好きと見え
岡山市　藤本満年

横道にそれて会議はつゝがなし
善人やいうて無能をいたわられ
熊本県　西口如川

かんぴんとならば度胸も腰も据え
腕まくりする程義務は考えず
岡山県　福島鉄兒

薄くとも僕の心を知る布團
縁のない銀行が又建ち初め
大阪市　塩浜一路

コンパスをきれいに廻す兄の腕



俗界に疲れ古巣に帰つて來　大阪市　福本翮骨

娘十八興奮させてTHE END　メモへいち〳〵書き込んでくるうるさがた　大阪市　西いわを

未亡人息子を連れて見せ歩き、氣のついた時は老年組に居り　北浜は沓屋も休む日曜日　岡山市　服部十九平

空席があつても偏屈立つており　新聞が言うほど被害酷からず　蒐集の趣味が盗癖まで嵩じ　岡山県　大森娯句樂

老妻もまだ妬く資格だけを持ち　殉職の時計握つた痛ましさ　寒空へ堆肥醗酵して御座り　同情に堪えぬ云訳聞かず去に　官服を着て正月も無く勤め　金釦照らす初日の氣持よさ　尼崎市　長谷川三司

ニューフェイス顔は野性の美とか云う　親分は寢卷のまゝで写させる　兵庫県　若林草右

妻手術をうく

筋となれ血となれ皿の肉、魚　法定数割るに声まで嗄してゐ　大阪市　足立春雄

追想にふけれと丸い月が出る　つき合ひも損得づくの小賢しさ　熊本県　有働芳仙

リヤカーで行く投票を撮される　酒臭い息黒板にはねかえり　淋しがる奴だと雲は消えてゆき　香川県　大西迷窓

僞りの微笑を洩らす程に老い　短氣とは別に心の温たかさ　大股に皆歩いてる十二月　岡山市　延永忠美

犬へまで氣嫌とつとく重役邸　こつこつと貯めて病院代となり　下関市　阪田良坊

凸凹の幾年月の銅火鉢　見送りが多くて三等車へ照れる　聊はどれもはげてる一等車　下関市　石川侃流

復興の広島

原爆を忘れたネオン水にゆれ　解除組裏門政治恋しがり　年末のストは暦にのらぬだけ　新嫁の地声きいたりオトーフヤサーン　大阪市　安岡珊枝郎

公約はさておき年賀狀忘れない　散歩路へちと眼ざわりのパチンコ屋　簑虫を朝寢の床で見つめおり　岡山市　大倉四案

月賦の事氣にかけつゝもパーマかけ　稲刈へ早くしまへと寺の鐘　広島県　山田季贊

人間が避姙する間に犬は殖え　雪空へなぜ稼がねばならぬのか　パン〳〵でない証拠にはもんぺ穿き　玉野市　中村たゞみ

母逝く

黄菊白菊質素な母を取り囲み　休もかと迷へば時計強く鳴り　丹精は腺病質の菊となり　大阪市　東喜久堂

貧乏は俺だけかいなと思ふ日々　樹齢もう限界点に來たさくら　大人の不倫純情で割り切れず　豹変して公明選挙踏みにじり　昇降機有難いなと思ひけり　倉敷市　木村千容

残照のやうな恋でも未亡人　幾組の夫婦が飛ぶか渡り鳥　ぎこちない子守は女史と呼ばれる身　とり入れの跡に余生のない桑山子　岡山県　田垣方大

桑局の処方で癒る長屋の子　産褥へ自炊の腕が役に立ち　死ぬ氣などない娘に男おどされる　どうみても役得だけぢやないくらし　ふれた手へ心のひゞく仲になり　大阪市　木村水堂

二男誕生

書類なき札多忙と突つ放し　退職に今度は株屋がやつてくる　修身は反対藤樹は悲しまむ　熊本県　花岡英子

堺市　八木摩天郎

大阪市　山本葉光

桃色の夢を破つた逮捕狀　高槻市　福田丁路

玄関に見事な菊のある暮し　岡山県　水谷谷水

女形その地声だけよして欲し
得心のいくまでしかめ面したり
おいそれと動いてくれぬとこに惚れ

第四次組閣完了す

武者ぶるい大阪冬の陣に似て　岡山県　椙原一善

考がへさせてとキツスまでも逃げ
クラス会未婚は私一人だけ
発言をしたばつかりに幹事になり　岡山県　田村藤波

あれほどに頭を下げたのに落選て
愚痴を云う間も毛糸編みつゞけ
徹夜業白む東へ深呼吸　岡山県　岡田夜潮

金刀比羅詣

人生の出直しせねば寄附出來ず
火吹竹吹く間もよちよち見放さず
返事せぬ顔を覗けば泣いて居り　岡山県　坂井三葉

番犬のつもり巡査に部屋を借し
人並に俺も自轉車盗まれた
空氣にも甘味があつた山の朝　岡山県　宮井三林坊

さゝやかに聖書のもとに死ねる人
極道をしたを苦労をしたと云い　大阪府　青柳扇子仙

かくしやくと朝日歌壇は茂吉選
前人未踏とは人磨を書く茂吉　岡山県　岡村牛耕

スローモーの長女の肩を持つてやり
冷やかに致死量ですと医者は言い
オーバのオの字も云はぬ娘が憐れ　岡山県　政田大介

焼酎の力木枯衝いて出る
退職をパチンコ屋迄に惜しまれる　大阪市　稲葉鳩花

母となる自覚が夢を捨てさせる
意地捨てゝ今宵は猫と寢るとしよう　茨木市　下山清潮

菊人形子はキヤラメルに氣を取られ
これからは俺が財布をにぎろうか
自由ですとは云へ淋しい嫁きおくれ
家出した子へ母が起き父がおき
似て來る子夫に知らせる文を書き　岡山県　本田惠二朗

三ツ目のくしやみが妻をあわてさせ　大阪市　眞鍋一瓢

まゝごとの魚屋さんも値切られる
とぼ〳〵と借金取りが去る長屋
けなげなり猫猫なりの身だしなみ　京都市　松川杜的

古日記めくれば大詔奉戴日
妻だけが俺の無能を否定する　大阪市　永田六龍子

養子辛く片袖濡れた訳も云い
あの顔が思い出せない旅の恋

同舟近詠

小肴の殺生はせず初日の出　金沢市　安山久留美

別荘の雨戸があいた初日の出
小康というのが拜む初日の出
初日の出末の子だけは未ださめず
初日の出鯛で儲けた顔もせず　松山市　前田伍健

捨てておけその爭いは金ですむ
老妻の眼鏡ついでに拭いてやり
留守番え舌打させる不足税
嫁いた娘の手の荒れ父として眺め
球根よおやすみ春に又会う　長野市　高峰柳兒

再軍備儲かる算盤弾く位置
手を替へて陳情頭数で來る　大阪市　麻生霞乃

奥さまはお暇まがきの孔雀草
ひだまりの屑屋に夢のある仕分け
悪人へ陽は燦々と惜しみなく

川柳に於けるデフオルム（変革性）ということ

大西野介

いろんな藝術の上で、よく藝術は作るものでなく、生むべきものであるという風なことが言われ、一般にそう考えられているようである。たとえば川柳のみにこの問題を限定すると、川柳は小手先で作るべきものでなく、川柳の本質に悟入した作家の、全一としての彼の内部から溢れ出るように生れた作品のみが本もの、である。これも鮎美氏流に言いかえれば、柳魂の自らなる発露が川柳作品であるという具合である。これは一面の考え方ではあるが、どうも戦後派作家である僕等にはうなづけない。

言うまでもなく、藝術する、という事は作家の一つの行爲である。行爲であるかぎり、一つの目的をもつた意識的のものである筈である。生むとか生まれるとかいうことは、自分の行動を、より明確に意識的に遂行するものでなく、むしろ無意識に近い、本能的な狀態である。こうした心的過程から、立派な作品が生れたとしても、それは狂人の描いた特異な絵画の傑作とあまりり逕庭がない。蟻がどれ程驚嘆すべき蟻の塔を作りあげたとしても、單なる蟻の本能の発現であるに止まり、それは藝術作品とは言いがたい。

藝術するとは創ること、言いかえれば、作家である自分自身を意識して、意識的に作品を創造することである。殊に川柳は、私の考え方に依ると、人間の実存に対する批評である。恋し、失望し、儲け、有頂天になる、人間の種々相に対する批評でなければならない。そんな意味に於いて、川柳作家は人生に対する、もつとも寸鉄人を刺す底の批評家でなければならない。批評とは知的活動である。批評とは深く自己に徹する意識と、対象に徹する意識との、緊密な関連に於いて成立するのである。川柳は、俳句や、短歌の如く、生むとか、生まれるとかいう、生やさしい場所に成立するものではない。

川柳が創造的な批評であるとすれば、当然作家のものに対する見方と、その表現ということが、問題になつて来る。ものの見方ということは、作家が如何に対象に感受し、如何に対象を把握し、これを作家の内部に於いて燃焼し、個性的変貌せしめるかという事である。作家のレンズは写眞機のレンズの如く單純

謹賀新春

橋本綠雨
大阪市東住吉区平野西之町八三

吉田水車
布施市新喜多三九五

須崎豆秋
大阪市阿倍野区旭町三丁目一四

富士野鞍馬
東京都新宿区若葉一丁目一五番地

西尾栞
大阪府中河内郡曙川村八尾木

川雜西成支部
土井文蝶
大阪市西成区松通九ノ二二

三條東洋樹
愛子
神戸市兵庫区神田町七九

川村伊知呂
大阪市南区桃谷町七一

慾すてゝ住めば
詩も湧く井の蛙
井蛙
山口県小郡町

喪中につき年賀欠礼
種瓜平
大阪府中河内郡上石切三六一

川雜八代支部
佐野卜占
八代市本町三丁目

北壁堂
三鴨美笑
米子市道笑町一丁目三四

でない。必ず、一つの傾斜を持つた角度と、歪みがある。この傾斜と角度が、川柳の場合には、痛烈な皮肉となり、豊なるうがちともなるのである。

そこで、「デフオルム」という事だが、この言葉は、一般に、作家がその表現しようとする対象を、作家の意識によつて解体し、対象の本質をより明確に表現せんがため、作家の知性によつて再組織して、こゝに第二の現実を創りあげて、表現することを意味する。こゝでは單純な写実的な表現からは、次第に遠ざかつて來る。創りあげられたものは、作家の個性を通過した、全く新らしい現実なのである。それで居乍ら、第一の現実の本質をより明確に表現している。デフオルムという文字は、普通に、変貌とか、変形とか訳されているようであるが、対象の変革性とでも考えるべきであろう。

このデフオルム的色彩を感ぜさせる川柳作品を示せば

天平の土にこぼれたウヰスキー　（翩骨）

これは川柳塔に現れた翩骨氏の作品であるが、「天平の土」と「ウヰスキー」との語感の距離から、烈しい美しさを創造している。が、この表現されている現実は、作家の知性を通じて変革された現実であつて、表現以前の現実とは別の現実である。おそらく翩骨氏は奈良か、飛鳥あたりに遊ばれて、洋酒の滴を土にこぼされたのであろう。「奈良の土」や「飛鳥の土」では、この作品は藝術として成立し得ないだろう。「天平」への飛躍によつて、おほらかな、ゆたかな、うがちを持ち得たものと考えらる。

白粉の下は光陰矢の如し　（史城）

痛烈なうがちの句、この「白紛の下」は「女の顔」であるが、女の顔へ光陰矢の如しでは句にならない。「白紛の下」という作家の知性を通過した表現によつて、女性の本質の一端――過ぎゆく歳月への嘆きと、容貌のおとろえに対する恐怖とが、如実に表現されつくされている。この場合、「白粉の下」と「女の顔」が密接でありすぎるので、創造された現実と、表現以前の現実とがあまり距離を持たないように考えられやすいが、藝術感情の上から言つて、一つの次元を異にした隔絶を感ぜらるべきだと考へる。

「デフオルム」という事は、批評としての川柳の持つている、精神的視覚の傾斜や、角度の上にかなり重要な位置を占めるべきように考えられる。古來、幾多の作家が、すでに手法として心得ていたように考えられる。今それを引証する余裕はないがこの小品が、その事実を、川柳作家の自覚にまで高める一端となれば幸いである。

最后にごく手近なところで、「デフオルム」の匂いを持つた作品を少しばかりあげてみよう。

怨念を質屋かまはず藏に入れ　（乱三）

狀袋のように平たくなつて死に　（惣吉）

車窓嘴かチルチルミチル顔並べ　（形水）

むかしむかし稼げば楽になりしとか　（豆秋）

抱擁を與へた金でめしにする　（宣堅）

（野介論筆―）

福田貞次（丁路）
高槻市郡家新町六五一

川雑大聖寺支部
一同
石川県大聖寺局区内
法ヶ坊一四

岩田藤三郎
福岡市箱崎茶屋小路
電話東四四一五

前田伍健
松山市真砂町二一

横浜市保土ヶ谷区岩崎町一〇
福田山雨楼

高峰柳兒
長野県須坂町六六七

襄中につき年賀欠礼
山本葉光
阿倍野局区内王子町二ノ三三

船木夢考
敦賀市津内二ノ五

大阪市城東区放出町西一ノ八四
長宗白鬼

吾郷玲人
大阪住吉新地

体温川柳会
貝塚市名越千石荘

三菱電機伊丹製作所
紅菱会文芸部
青蛙川柳会
尼崎市南清水字中野八〇
電話伊丹四八〇―三番
尼崎三九〇四番

暫　即席料理
新田谷しばらく
南区久左ヱ門町
新戎橋北詰角
電話南㊀八元六番

秋月宏方
和歌山市今福北部二六

大阪
金泉万樂

長野文庫
今治市神明町

酒井大楼句碑建立委員会
（暁童・宵明・他）

岡山県英田郡大原町
大原川柳社　諷柳会

橋本晴の助
津山市美濃町

大和高田市大中北
戸田嘉一
戸田悦子

東京・大阪柳壇の交叉

品川陣居

川柳は文学の一ジャンルであると、ぼくらは現在、何の疑いもなくいつているのであるが、こう言い切れるようになるまでには、随分と年月をかけてきた。

と、いつても実のことろ、川柳文学説を強調してきたのは、大阪柳壇の方が東京柳壇よりさきであつたと、ぼくは認識している。それというのも由来大阪は、少し誇張していえば大近松、大西鶴を産んでこの方、文学の面では空白が永くつゞき、明治、大正、昭和を通じて、散文芸術は東京の文学者に独断されていたとは、すこし言いすぎかもしれないが、ともかく散文芸術を売り物にしたかつて「中央公論」「改造」「文芸春秋」のごとき綜合雑誌を一つももたなかつたのにみても、大阪に散文芸術を育てる基盤のなかつた（或いは現在でも）のは事実である。

だから、大阪文化人としては、散文芸術としての文学—小説、戯曲随筆のたぐいは所有しなくとも、短詩としての川柳を文学の一ジャンルとして育てゝ行こうという気構えが、東京より強かつたと、ぼくは考えているのである。それなればこそ、あらゆる機会を捉え、文化社会の前面に川柳を押し出す企画が立てられた。ラジオ放送に大阪市主催の文化的行事に川柳を売り込んだ功績は巨きいといわねばならない。

東京柳壇としては、川柳を社会的浸潤というコトバで、広く社会に認めさせようとしても、わずかに漫画を手がかりとしたくらいのもので、到底大阪柳壇の如き大がかりなことはなしえなかつた。それも、いわゆる講談社文化と一しゆの蔑称でいわれた部面での押し出し方で、腹の中では、己れの川柳を自虐していたのだから、これはどうしても良心的とはいえなかつたのである。

東京柳壇が、真に川柳を遇する道を知らず、漫画とタイアップして娯楽部門でわずかに川柳の笑いの面を一ときわアクドク彩つていた間に、大阪柳壇では、麻生路郎岸本水府、食満南北というベテランによつて、流麗流るゝごとき毛筆に彩管にのせられて料亭に、百貨店のウインドウに、はたまた街の催しもの絵行燈にこれでもか、これでもかと衆人の眼をとらえることに意をつくしたのであるから川柳の普及はめざましいものであつた。しかも川柳を在来あやまられた認識から解放して、品位あるもの、少しく自負していえば、人生指針として己れの川柳を誇示したのである。

君見給へほうれん草が伸びてゐる　路郎

この路郎先生のフイロソフイカルな一句のごとき、大げさに言えば大阪中到る処の「心の在る場所」に掲げられたのである、いわば大阪人の人口に膾炙した名句として印象づけられたものである。これは句と共に先生の名筆にもよるのであるが、今日大阪文化人として自他ともゆるしている多数の方々の賛助が集まり「麻生路郎主宰★川柳雑誌」を大阪文化の巨きな存在としている事実が何よりの証左である。——こんなにいうと、この一文の執筆者名が「福田山雨楼」の誤植ではないのかと怪しまれそうだが、これはまさしく客観の上に立つた実証であるから、ぼくのいうことを信用してもらつてあやまりはないのである。

前置きは、これくらいにして本題の説明にはいろう。

概括していうと——いや実のところきのうまでは大阪川柳作品にぼくは飽き足らないものが多かつた。それは東京流の作り方からいうと、大阪流のはあまりにも水の如く淡々として物足りなかつたのである。これはわれわれ東京の作句家が、十七字という乏しい字数の枠を大切にするあまり、（句語）のニュアンスをあまりにも貴重視して内容を盛りすぎる結果、どうしても、すらりとした句の姿にならないのである。句がすらりとしていようが、ぎくしやくしていようが、句の本質にはかんけいのないことであるが、東京の川柳作品の形態にはぎくしやくしたものが多く、従つて句語に難解なものゝ多いのは事実である。

「詩川柳というジャンルを、とくに強調して、若い作句家を、その川柳ジャンルの中にとじ込めているのが、現在東京柳壇の本体なの

謹賀新春

中島鉄洲　鳥取市川端町三ノ一五
杉谷湖山　鳥取市職人町
石田沐天　阿倍野区阪南町西二ノ三三
大阪市東住吉区桑津町七ノ二二
西いわを
黒本芳泉　広島県竹原町
福井県小浜町生玉
村田医院
村田眉丈
愛媛県越智郡津倉村字仁江
村上旭童
大阪市東住吉局区内
西今川町五ノ三〇
福本翮骨
大阪市東淀川区木川西ノ町三
西森花村
兵庫県多紀郡日置村辻九八七
家沢薺花
大阪市阿倍野区天王寺町
北三丁目五五ノ一
福島正則
山陰合同銀行鳥取南支店
森本法泉子

だ。ところが詩川柳というだけではあまり莫然としているというので、「日本川柳」を独力で発刊している山田河鹿男君は「短詩型文学」と川柳を呼んで、川柳の形態に具体性を与えたのである。こういえば、川柳は詩であるなどいうのをあまり好まない大阪柳壇にもきつと理解を深めてもらえるとおもうのだが、どうであろうか。

河鹿男君は東京柳壇では革新派をもつて任じている作家だけに、芸も細かいし、作句そのものも、いわゆる文学てき——散文芸術を圧縮したごとき含みをもつている。

作品例は、あとで紹介するが、河鹿男君は在来の「詩川柳」という、いさゝか抽象てきな呼称から「短詩型文学」という具体てきな呼称を引き出してきたというのは同君の手柄であるといわねばならない。

蠅一匹ホテルは皿を取替える　戸倉普天

この大阪方作品のごときは、河鹿男君の短詩型文学のジャンルに入れてもいゝものだとおもう。神経の徹つた、そのホテル機構の上級なことがよく表現されている。〃川柳塔〃の巻頭作句中の一句である貫録にそむかない。

出養生浴衣の柄がこまかすぎ　水谷鮎美

ぼくは鮎美という雅称を久しい前から眼にしているが、いかにもお人柄の偲ばれる作品である、ばかりか、その出養生しているひと——もちろん女性—の若さが、こまかい柄の浴衣で逆に表現されているところ、まことに巧手である。こういう作句ぶりを推賞する文章をそちらの雑誌でしばしば読まされているだけに、成る程と感心させられるのである。水の如く淡々としていて物足りぬと感じたきのうまでのぼくの大阪作品にたいする蒙を啓いてくれた中のもつとも大きな手がかりとなつた一句であることを白状しておきたい。

青い眼の兒にも持たせた櫻ン坊　鮎美

混血児もんだいのやかましい昨今謳いえて至妙である、桜ン坊がまたとなくよく利いている。

逢ひに行く髪とも知らず梳いてやり　尾崎方正

古い表現でいて戦後派娘をもつた母親がぴたりとした感じで表出されている。母という字を使わぬのがいゝなどというと初心めくが、やはり母といわずに〃梳いてやり〃と何気なく流したのが巧手である。

かき舟が夜の重さに耐えてをり　福田妄夢

〃夜の重さ〃でいわずと道頓堀のよどんだ流れを的確に表現している憎いばかりの巧さ——どうやら東京方も、黙つて引ッ込んでいられなくなつてきたが、もう少し大阪方に敬意を表そう。——

吹殻の長さの違う停留所　小林文月

せめてもの婦警は櫛を貸してやり　山根白星

日本語も英語も誤字のラブレター　西森花村

イヤリング不貞の色に螢光燈　足立春雄

二号さんも犬も秋田の産の由　水谷谷水

盲人をさびしがらすなチレビジョン　山本葉光

大阪方のこれらの句を一々ほめたり感心したりしていたのでは東京方の敗色濃しとでも大阪の方に錯覚されたらたいへんだから、東京方のぼくは東京方びひいきの本性を現わしてさしづめ河鹿男君に東京の革新派を代表してもらつて同君の近作から少々おめにかけよう。

山田河鹿男作品

貧乏山脈とかげ女臭へひたと這う

不敵にも秘戯にまつはるあぶら虫

腿といふ武器で女が生きてゆく

人もけだもの豚の細胞呑み下す

消費街アタミ精子がこぞつて行く

河鹿男君はこういう句ばかり作つているのではないが、敢て大阪方のドギモを抜こうとして、ぼくがいたづらしたのであることを了承されたい。

大阪の川柳と東京の川柳が、どういうところで交叉するか——というぼくの考えは、まだまとまつていないのであるが、川柳を文学とするべく努力して来られた大阪柳壇の永年の労に感謝するというぼくの〃心〃が、やがて東京、大阪の両柳壇の接近を、きつと成し遂げてみせると誇号しうると信ずるのである。

社の告知板

▼一月十日(第二土曜の夕)の新春句会で一九五二年度の不朽洞賞の把持者と各題天位者との優勝カップ獲得の戦決並びに、句会全出席者の表彰を行うので右に該当する方は棄権せられぬ様特に出席されたい。会場は光明寺。

熊本県菊地郡大津町　西口如川
堺市九間町東一丁山之口筋　八木摩天郎
佐賀市水ヶ江町郵便局裏　南川光男
玉野市玉八七七　渡辺あきら
玉野市玉絵ノ原社宅　迫田美婦適
川雑貴生川支部会員　山田季賛
広島県可部局区内亀山村綾ヶ谷　山田スミ子

麻生路郎著　水武書房版

好評嘖々

川柳を研究したい人にも好適の書

本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものかから」説き起して収むるところ三十七講、平明で、親切で初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書である。敢えて一読を薦む。

B六版　(二一二頁)　改正定價一三〇円　送費十六円

取次御注文は　大阪市住吉局区内万代西五丁目二五　振替口座大阪七五〇五〇　**川柳雑誌社**

近作柳樽

路郎選

期待した金瓶梅にがつかりし　今治市　長野　文庫
面白く読まれ漱石苦笑ひ　同
暮し向き白書と言うてさらけ出し　同
アラヽギに名が載つて居て嫁ぎおくれ　同
啄木の詩も織り込んだラブレター　同
白村の恋愛観を小馬鹿にし　同
靴はけば手の振り方も違つて來　同
目的地までは三々五々公費　同
チヤタレーじゃあ足らず探求謄写刷　同
源氏の君のかけらも貴男持たぬ人　広島県　黒本　芳泉
チンドン屋巳が姿のフト哀し　同
看護婦に氣の小さいのを笑われた　同
三代の興亡秘めし古時計　同
柿一つ残して山家冬に入る　同
友情へ済まなく今日は執達吏　同
競輪の市営が文化とも云えず　出雲市　久家代仕男
喧嘩する癖に会わねば逢ひたがり　同
支那でさへ見られぬローカル線の汽車　同
脱穀の音せわしない秋にする　同
お願ひがあるとわ言わず肩をもみ　同
秋風に感傷もなし六十一　大和高田市　岩垣日本村
晩酌を夜勤窓からふと眺め　同
貧しさの中にも菊の花は咲く　同
自轉車に女が乗つた秋の道　同
三行の職求めても十二月　同

仲人は税金引かぬ額をいひ　和歌山市　秋月　宏方
五十すぎでも夫にはちとあまえ　同
明治から生きているのに名も出でず　同
極道であつた末子に養われ　同
胎つたら堕ろすと意見一致して　同
御時勢へ寺も手を出すアルバイト　広島県　山田　桂角
お化粧をしたい盛りを病み続け　同
例年のどこへストーブ席をとり　同
めが出たか分家へ人の絶間なし　同
愛すべき図々しさもある蛙　同
十二月妓へ廻す金が入り　大阪市　石川ひさみ
ひと一人救した金で逢ひつづけ　同
二号の娘母の貞操着て出社　同
奥さんが居るワイシャツと思はれず　同
一日の稼ぎ子供にあなどられ　同
靡く日のいつかはあらん貢いでゐ　貝塚市　武安　嘉彦
背比べもして看護婦と親しなり　同
生きのびて午後とならんかぞれもよし　同
癒りさえすればともてぬ彼は言ひ　同
へそくりを使えば分るのに困り　津山市　定金白柳子
姑にほめられた花ばかり活け　同
職人の趣味がり版に手を汚し　同
妹に汽車賃もらふ姉の運　同
病人に何思へとや秋風よ　貝塚市　上坂　朱人
前職はダンス教師とあるカルテ　同
レデーメードといふセーターの冷たさよ　同
おぢいさんからの家を秋刀魚でくまぶらし　同
日記帳秋の頁が足らぬ恋　京都市　清水とみ子
儲けてる音は隣りの製材所　同
ほろ酔いが土産屋へ來て手こずらせ　同
振り返る女同志の祇園町　同

川柳今月の歴史

（一月の巻）

主要事件、行事、動勢人事等

大正七年一月正木柳建寺は朝鮮創始の川柳会を開廷した。昭和六年一月号文芸春秋に川柳時事漫画六頁を掲載。同七年一月号同誌に「現代百科小事録」を掲げ川柳部門は故山口剛が執筆した。同年一月十日番傘川柳社は創立二十周年記念川柳大会を大阪中央公会堂で開催。同年一月十六日麻生路郎は川雑神戸支部句会で「爆弾を抱いて来る」と題して講演し柳壇にセンセーションをまき起した。同年一月二十一日から二月三日までむさしの川柳会で作句寒修行の催しをした。同八年一月号文芸春秋に古今川柳名句百吟を掲載、選者は剣花坊、角恋坊、飴ン坊、雀郎の四氏。同十二年一月十日番傘川柳社主催全国川柳大会を大阪中央公会堂で開催。同十五年一月ふあうすと川柳社はふあうすと賞入選作品を発表。同年一月号川柳倶楽部（和田天民子主宰）は俳詩と改題し柳壇に話題をまいた。同十六年一月旭川柳社は創立二十五周年記念大会開催。同十七年一月債券に関する川柳画展を大蔵省と日本川柳協会と共同で催す。昭和十二年七月十四日川柳飜訳研究会創立句会が神田一ッ橋如水会館で開催。

主要図書の出版

明治三十八年一月（以下何れも一月につきこれを省略）岡田三面子編「狂句集」が

朝風呂をクビと知らずにうらやまれ　福岡市　岩田十三楼
片端し傳說こわす考古学　同　同
妻語らず僕が默した夜の寒さ　鳥取市　森本法泉子
旅に聞く鐘は湖水を越えて來る　倉敷市　同
客が來てゐるのに呆けた時計鳴り　同　野田素身郎
幹事もう無駄な酒とは知りつゝも　同　同
誤解だと二度は否定したものの　同　井野　格一
恋をしているため薄給でもやめず　同　同
金づまりでもなさそうなオーバを着　同　酒井びか平
只飲みの客が下駄まで替へて去に　同　同
長尻へまた〳〵お茶を所望され　同　同
あきらめた顏で値上げの記事を読み　同　同
我家の跡に溫泉マーク建ち　兵庫県　同
細長うやつてまんねと末だかっぎ　同　同
浮氣する夫人度胸をほめられる　同　岡田　青果
貸さぬとも貸すとも言はぬ返事が來　岡山県　同
女客來て避姙器具買ひそびれ　同　同
折箱をさげて並んで小便し　同　津田麦太楼
牡蠣の灯え茶粕を投げる交番所　岡山市　同
ほろ酔が杓子に切手貼つて居り　同　同
故郷の父そりや赤が出た青が出た　同　竹内花代子
飼れてるように女はあつかわれ　大阪市　同
親馬鹿が娘の嘘をかぼてやり　同　同
置時計狂ふたまゝで暮になり　同　花柳万亀子
若さまだ捨てぬ手紙が懐かしし　滋賀県　同
疎開して絵にもならないとこで住み　同　同
親の意にそへばかよわい人に添ひ　同　森本　花子
しばらくは姉の墓標へ傘をさし　兵庫県　同
大阪の雨に濡れるも久しぶり　同　同
夫には済まぬお方を抱く不幸　同　井谷　清
鶴見橋君待つ宵の星明り　岡山県　同
パトカーのお世話になって産が済み　同　同
口程に色事出來ず七十二　同　松井　清志
サンガーの手落ち小さな息をする　東京都　同
泣くだけの女と生れ苦労する　同　同
嘘と嘘夜を別れてそれつきり　同　日置　文笑
新聞の美談の主を見て通り　鳥取県　同
花好きえ花々々の見舞客　同　同
セーターの色も鮮やか妻若し　同　西川　一舟
恐妻家共がぞろ〳〵終電車　大阪市　同
奥さんのヒス聞いて去ぬリンタク屋　同　同
料亭の会議ペラ〳〵〳〵と済み　同　長尾　越鳥
パチンコ屋蜜蜂程に移轉をし　岡山県　同
百姓をきらう養子がもうけだし　同　同
品の有る娘だけが母が違つて居　同　高岡　薫
畫になりやつと着物にきめて出る　京都市　同
妻はもうベースアップの成つた計　同　同
憂き晴らす氣のパチンコで尙くもり　同　沖　一糸
髯武者の笑ふ如くに栗がうれ　岡山県　同
血のにじむ金が過納で有つたのか　同　同
思ひ出の妻のゆかたを着た山案子　同　中江破天荒
佛壇屋大賣出しに参加する　大阪市　同
一臼は搗きませうよと妻は言ひ　同　同
この椅子は役得も無く馬鹿にされ　同　森川　東南
情慾を愛と信じて四十すぎ　岡山県　同
我が家に似た様な話し止めておけ　同　同
めし焚きと洗濯だけの社会観　同　吉原　紅月
男などみんな馬鹿よと赤い爪　兵庫県　同
ダンサーの心ネオンに似て尖り　同　同
老らくの恋に破れて魚籠を下げ　岡山市　宗高八ッ茶
子を連れた立読み本屋ハラ〳〵し　同　同
手内職それ見たことか妻寢込み　同　同

有斐閣から。同三十九年高木角恋坊著「家庭川柳」が鹿鳴社から。同四十三年小林紫軒編「名吟川柳集」が柏原圭文堂から。同四十四年袖珍文庫十五篇「柳樽」一輯及同文庫二十五篇「柳樽」二輯が三教書院から。同四十五年今井卯木著「川柳江戸砂子」が西濃印刷会社から。大正八年「川柳須磨籬」が川柳松枝会から。同年永山儀吉編「久流美句集かき松葉」が同氏から。同十年「縮刷川柳やなぎ樽」が明文館から。同十二年富田青波著「川柳句集浮世帳」がらく書川柳社から。同年尾山夜半杖著「夜半杖句集雪つぶて」が同氏から。同十一年佐藤紫紘編「類題川柳名句集」が目黒書店から。同十五年白石維想楼編「現代川柳叢書一編井上信子集」が柳樽寺川柳会から。同年西原柳雨著「川柳江戸名物」が春陽堂から。昭和二年同氏著「改訂増補川柳吉原志」が春陽堂から。同年古家夢村編「影像句集」が広島影像社から。同三年篠田一編「柳多留二篇」が柳書刊行会から。同四年松村篤三著「川柳から観たユーモア日本」が竜文社から。同五年西原柳雨校訂「誹風柳多留上」が岩波書店から。同六年飯島花月著「川柳真田三代記」が柳書刊行会から。同七年今井卯三著「川柳の新研究」が大同館から。同年渡辺虹衣著「川柳家庭行事」が文友舘から。同九年坊野寿山著「花柳吟寿山調(三)」が松花から。同年宮尾しげを著「昭和川柳百人一首初篇」が小嶺領布会から。同十年石森静太著「静太句集」が同氏から。同年植木鬼仏著「隠語と用語」が川柳文芸社から。同年名川邑川編「うきよ川柳名句集」がうきよ川柳社から。同九年山本斗酒句、小島一溪画「横浜百景」が横浜貿易新報社から。同十二年小田夢路著「川柳

手土産の値を聞いてから女房食べ　同
野良着きて立つても菊は菊の味　愛媛県　村上　旭童
おやじ教育をやれとは父の陣い友　同
忙中に閑ありとせん村の雨　同
女或る日夫の下駄で來た市場　東都市　鈴木加代子
身も軽く心も軽く秋の足　同
留守番をいつもさせられ老社員　岡山県　難波　鴻峰
火焔ビン投げた報ひがはつきり出　同
恩給の他に仲人業で食ひ　大阪市　岩垣一点子
愚夫愚妻お互ひさまで睦じい　同
父は父子は子のプラン秋日和　米子市　小西　雄々
当選三回自家用車ほしくなり　同
雑草と言われ八千万のひとり　滋賀県　久保　和友
一年の垢歳末の日記帳　同
未完成のセーター形見に轉勤し　玉野市　迫田美婦適
バラ色の人生などゝ適齢期　同
池田邸鶏より記者に起される　岡山県　難波　陽炎
嫁きおくれ花一輪の文机　同
パチンコ屋素通り出來ぬ腕になり　岡山県　島崎　夢刀
土曜日の夜降る雨が落つかせ　同
看護婦と趣味が同じでよく喋り　岡山県　三木　香平
牧賄の予算も入れた建築費　同
アベックで見舞われ後の味氣なさ　高槻市　富永　靜臥
倦怠期甘える妻がうとましく　同
此処からが兵庫縣です補助シート　大阪市　吾郷　玲人
植木市寒さに強いだけを聞き　同
後添への意見へ長女反対し　岡山県　國正田吾作
出戻りが又女教員になりすまし　同
風変りの茶器支那燒にして仕舞い　岡山県　池田　古心
遊ばして呆れる夫を信じきり　同
母親の氣の済む様な嘘も書き　岡山県　國枝　朴仙
蟹股で歩くとこまで親ゆづり　同
産制の何うにもならぬ若さに居　熊本県　鹿本　実信
生きている父に会へない混血兒　同
告げ口はたまにうれしいこども云い　同　手島　巨船
アプレゲールとかくスリルをもちたがり　同
親の言ふ通りになつて頼られず　愛媛県　藤田　博人
行商の賣れない儘の旅も良し　同
菊褒めて菊貰て一日は経ち　愛媛県　鳥井　川鳥
正月が近づいたネは金のこと　同
景色どころか網棚へ氣を配り　岡山県　松村　怠坊
先生と思はれぬ旅面白し　同
未亡人衣更すら疑はれ　鳥取市　泉　比鳥
病癒えもうやめたのよ天理教　同
質物を集め質屋も金つまり　香川県　香川　清
質流れ買ひたし質を置く身なり　同
テレビジョンうちも買おかごきた若し　神戸市　竹内　春潮
土ばかり見てゝも麦もはえて來す　同
浮氣すなと自殺の記事を読んでから　堺　市　丹波　太路
ガス風呂が出來て親類先づ遣入り　同
仲人は白痴を一人かくしとき　津山市　田口今日坊
男の子もう奴凧見て戻り　同
足元の煙草で待つた事が知れ　岡山県　小林　夢介
趣味持たぬ男を会計係にし　同
名月を夜汽車の窓で見てた旅　吹田市　橋本　幸男
名所だけあつてビールも高くつき　同
ローソクがまた入りそうなストとなり　岡山市　河田　五風
重役は女將の智慧も少し借り　同
急病へ医者はこれからお茶を飲み　和歌山県　滝谷　右郎
おとなしい精神病者はほつとかれ　同
お稽古が済めば師匠も子供めき　岡山県　藤井　呆声
仲人はタンス屋迄も決めて去に　同

夢路集」が番傘川柳社から。同年稲垣満一郎著「風流漫筆飛弾栗毛」が日本風流漫画会から。同年米江豊編「伊藤美沙子遺句集」が同氏から。同年堀口塊人著「昭和川柳読本」が昭和川柳社から。同十三年氷原社同人編「田中五呂八遺句集」が川柳氷原社から。同年本山桂川編「久良伎全集」が川柳久良伎全集刊行会から。同十四年渡辺虹衣著「川柳銃後と前線」が人文書院から。同十六年伊良子擁一著「自由律川柳合同句集」が視野発行所から。同十八年横山青蛾著「川柳狂歌」が長崎書店から何れも出版。

（追補）昭和二年九月号「性論」に岡田三面子編「類題秀句新末摘花」を発表、後これをまとめて単行本として性論社から出版。

主要柳誌の興廃

明治四十一年横浜から卯木、幻怪坊らによつて「新川柳」創刊、大正四年から「短詩」と改題。同四十二年愛媛県から「煎茶録」創刊。同四十五年東京から出ていた「矢車」廃刊。大正三年横浜から出ていた「春雨」休刊。同二年松山から「凩」創刊。同年金沢久流美らによつて「六華」創刊、四号よりイシズヱと改題。同年大阪から「番傘」創刊。同年白河から「東北川柳」創刊。同六年奉天から「ほうてん」創刊。同七年岡山から鉄羅漢によつて「街灯」創刊、十二月まで続く。同九年大連から濤明

ニキビ
にきびとり
美顔水
桃谷順天館

清流へ紅葉せぬまゝ一葉落ち　下関市　向田妻楊子
立ちづめの列車が着いた阿蘇の朝　同
素封家のぼん〳〵左派で押出され　岡山県佐々部満佐志
老人の日待てすに父は彌陀のもと　同
高熱にあえぎ蠅にはあなどられ　貝塚市　谷口　流水
筆不精だけどクイズはまめに書き　同
倦怠期猫へも酷い妻となり　岡山県　西山　節子
蹴り飛ばす足とも知らず猫はジャレ　同
借金が日向ぼつこを寒うする　岡山県　有本ごん平
小綺麗に小菊と住んで未亡人　同
意地を張る女に兜ぬぐどする　貝塚市　河楊　梵鐘
何かいゝ事があつたらし娘は唄い　同
初恋は再軍備にもちよつとふれ　貝塚市　宮本六三四
パチンコをやめた〳〵を空で聞き　同
なつてない句で大臣わ記事に成り　愛媛県　渡辺　曉童
ハンドバック持たすと男あけたがり　同
すいみんをちぢめ毛糸を編む生活　山口県　加川　大然
旗竿がよう賣れました立太子　同
新大臣押し付けられたように言ひ　鳥取県　亀崎　漫歩
改札は笑つたことの無い男　同
生理学少しは知つた子も雑り　滋賀県　土守トン坊
京の姉京のお内儀になり切つて　同
終戦七年未だ住宅の列に居る　大阪市　池戸　桃村
病院の話題不幸が多すぎて　同　戸田　悦子
先輩に智慧を借られた日の機嫌　大和高田市　同
鳶の声さつと開いたビルの窓　同
スキヤンダル女虚栄を満たす氣か　布施市　大塚　一球
松かざりさて税務署もお休みか　同
サラリーを予算に入れて田を作り　岡山県　光好三四詩
所長とは見えぬ姿で牛を追ひ　同
夜学生ボーイフレンド多過ぎる　愛知県　柴田　無十

病む或る日藝者をあげて死んだろか　同
万事金万事にくどい男なり　宇和島　橋本　迷峰
ハイヒール見ている方がくたびれる　同
いつの間に田舎へ知れた行狀記　貝塚市　宮本　甲馬
逢いにゆくちゝいと知らず席ゆずり　同
きつちりと火鉢へ据る妻淋し　今治市　柴田　青雨
夢よ一度五十の白髪わけてみる　同
御隠居の一大事なり株下る　貝塚市　永吉　喜好
買物もつい忘れてる草野球　同
満員が一層嬉しい肩が触れ　京都市　東　志郎
思い出があり沿線の月見草　同
停年のあと履歴書のいらぬとこ　京都市　村本　香果
足の爪がこんなにのびた倦怠期　同
養母より生母の方がいゝ暮し　石川県　杉浦　酔羊
皺のばすクリームつけて御外出　同
晉痴ですと辞退しきれぬ番が來る　米子市　勝田　正郎
思惑がはずれ返品まだ続き　同
割勘へ千円ばかり出して來る　大阪市　佐野　牛歩
アクセサリー眞赤な恋を象徴し　同
継母もやつぱり泣いた母映画　佐賀市　南川　光男
銀行の貸付のらりくらり逃げ　同
秋の陽に蠅と遊んでいて貧し　高知県　岡本　元馬
子供好きと云ふのを子供直ぐに知り　同
メロディーに合はす甲板洗いなる　尾道市　渡辺伊津志
稲刈の馴れぬ手首へ日が当る　同
槍さびを唄つて聞かす父の齡　京都市　井上　吉造
立太子軍艦マーチが欲しいとこ　貝塚市　多炭　若楊
女の子喧嘩する度あごを出し　岡山県　岡野風の子
美しい姉と歩いて氣がつかれ　京都市　佐久間折草
借金よ太れ水爆鳴る日まで　鳥取市　徳持晩稲子
バラックで我慢し高利貸し続け　岡山県　大塚　稔

らによつて「娘々廟」創刊。同十年大阪から「はこやなぎ」創刊。同十二年秋田から「鈴蘭」創刊。同十三年大阪から「川柳雑誌」創刊。同十四年平壤から「しぶ茶」創刊。同十四年川柳新星会から「桂馬」創刊。同十五年京都から「さいころ」創刊。同年大連から「砕氷船」創刊。同年金沢末広川柳会から「いただき」創刊、昭和二年十一月まで続く。同年松阪から「八雲」創刊、三号まで。同年岡山から溪雪らによつて「くろ土」創刊。同年函館から「雪柳」創刊。同三年松江から「かげらふ」復刊。同年神戸から出ていた「番茶」終刊。同四年岡山から「甕」創刊。同五年金沢から兎絲子らによつて「サイレン」創刊。同年大阪から「雨蛙」創刊。同六年金沢から「鬱」木曜会報の改題として出る、二号まで。同年東京山門らによつて「紅座」創刊、後川柳倶楽部と改題。同年上田から「六文銭」復刊。同年長崎の各流派が合併して「川柳南蛮社」創立。同年京都緑郎、清堂らによつて「川柳タイムス」創刊。同八年犬山から「飛沫」創刊、六号まで続く。同年京都雨山らによつて「搗硝子」創刊。同年松江から「川柳叢雲」が神火の後身として出る。同年大阪から「三人の手」創

どん底の生活も楽しみようがあり　愛媛県　岩川　寛虚
眞面目過ぎ氣苦労多き女なり　貝塚市　美野百合子
病人が見舞えばさかさに労られ　貝塚市　小島さぎす
見合して姿は結婚いやと逃げ　岡山県　中尾　貞教
長男にほしい度胸を妹もち　大阪市　西川　惠風
日曜日箒の先で追ひ出され　大阪市　木村　嘉勇
ひやかしのような恋より知つていや　貝塚市　小田　柳叟
賞金が入つた日妻の流行歌　大阪市　不二田一三夫
街錄は顔の中から顔をより　大和高田市　戸田　嘉一
手を切りにゆくに女の化粧して　貝塚市　岸　麻沙留
療養所十九貫の人も居り　貝塚市　堀井　一峰
盗電は御法度されどストはスト　出雲市　佐藤まさる
逆境へ無暗に迷信深くなり　岡山県　河本　一石
金があり國民服でもよく似合ひ　大阪市　横田　方眠
立太子礼囚人達に菊薫る　高槻市　谷脇土佐兒

あの顔で顔半分のあくびをし　大阪府　森本黑天子
ひまわりの様に彼女へつきまわり　岡山県　繁松　玉露
熊或日氷山にゐる夢を見た　大阪市　成田壽々女
向風競輪ほどに踏んで行く　出雲市　多久和聖一郎
白晝でもピストルを向け頸をしめ　赤穂市　川西　去水
簡單にすむと弁護士けしをかけ　岡山県　森永　天明
干柿の影は隣で見つめられ　福岡市　小川　清流
サンマ燒く我が家であれど生きる幸　東京都　田中　稻水
嫁の荷へ雜巾入れる親心　大阪市　永田都詩子
新聞に一度も出ない金バッヂ　今治市　黑川　秀義
わがことの様によろこぶのも恩師　宮崎市　野口卯之助
自分にも描け相なのが入選し　岡山県　堀　不漁
療養所こゝにも咲いた恋の花　津山市　菱川　正美
臨終へ子の無い人の哀れさよ　石川県　桑山　とよ
人間かどうたぐつて見る税吏來る　高知市　松下　蘇水
雨の宿ピンポンばかりして眠る　大阪市　木谷　巣澄

一路集

後姿

市場沒食子選

幾人の眼を背に感じ乍ら行く　青果
後姿期待はずれの顔と合い　陽炎
行きずりの後姿に亡妻を偲び　一路
亡き父の後姿に子もよく似　良坊
後姿見てる噂は八ヶ月　斗志
鏡台へ後姿を二度三度　寿限無
お見合は後姿も点がつき　房子
あでやかな後姿の芸妓はん　迷羊

踊る娘の後姿も見る観衆　季賓
後姿だけが見えてる人の垣　柳叟
税吏去ぬ後姿え塩を撒き　薫
派手同志後姿を振り返り　光郎
嫁遅れ後姿が淋し過ぎ　朴仙
税務署員背に視線が寒く射る　清柳坊
尻揺れる後姿も肥満症　とよ
恋人の後姿をバスが呑み　五風
人の世は山にも後姿つけ　怠坊
素通りの後姿へ走り出る　夢介
背番号砂塵の中にタッチなる　一峰
京の秋後姿の妓を画き　美婦適
浮世絵の後姿をはがいがり　十三楼
見た様な姿しばらく後を追い　良畔子
屋台店後姿は酔ふている　信雄

湯上りは後姿で返事をし　一平
後姿あれだと刑事尾けてゆき　破天荒
娘の着替え後姿で待たせられ　牛歩
かたくなが後姿に見える伯父　木魚
チャリンコの後姿にするどい目　清潮
運チャンの後姿へ話しかけ　今日坊
見送りの視線を知つた歩きよう　英子
後姿昔の面影ちよつと見え　呑舟
蛇の目傘後姿のいきなこと　利行
廻り椅子後姿で返事をし　雄々
シヤツターは後姿を撮つた音　一舟
柳腰後姿は絵に似たり　方眠
後姿大きな尻やなと思ひ　鉄児
花嫁の後姿も写しとき　風の子
振袖の後姿もとつておき　輝子

刊、二月号から「手」と改題。同九年金沢から坊風らによつて「擬宝珠会報」創刊。同年東京から「川柳研究」が国民川柳の改題として出る。同年津山から白鳳らによつて「羽ばたき」創刊。同年東京から酔月、栗坊らによつて「日輪」創刊。同年名古屋から「草薙」創刊。同年東京から出ていた「道柳」休刊。同年朝鮮から麗月冠らによつて「川柳四温」創刊。同年高知から「くろしほ」創刊、十年三月まで続く。同年大阪から七緑らによつて「水郷」創刊。同十年静岡から「阿倍川」創刊。同年小松から「うき城」創刊。同年京都から「川柳青人社」創立。同十一年長野から「みすず」創刊。同年神戸から「アケビ」創刊。同年松江から「みなかみ」創刊。同年朝鮮から「枯露柿」創刊。同十三年東京の「九十路」は「せんりう」に合流。同年名古屋から「金鯱番傘」創刊。同十五年信州から一樹らによつて「やなぎ」創刊。同十六年高松の案山子川柳社解散合流して隔月に「三白」を出す。

著名川柳家の他界

堀田啓坊（東京）は大正九年一月七日二十四才で逝く。福島群星（大正川柳の古い作家）は同十一年一月二十五日永眠。酒井零骨（大阪川雜同人）は同十四年一月十三日二十八才で長逝。矢田冷刀（朝鮮旧号右大臣）は昭和五年一月十六日三十四才で病歿、川雜支部幹事として活躍した。大槻如電（東京）は同六年一月八十七才で永眠、歌派江戸研究家で言海の大槻文彦の兄。松村敏郎（サンフランシスコ）は同年十月三十一日四十四才で長逝。鈴木竹末（東京）は同七年一月十二日逝く。伊上凡骨（東京）は同八年一月二十九日五十九才で他界、木

高島田後姿も撮つて置き　天明
いゝ仲は後姿ですねてゐる　柳月
拗ねてゐる後姿の美しさ　葉光
後から撮つたヌードがものたらず　三葉
消えてゆく後姿へアンコール　呆声
アトリエの後姿にある魅力　嘉一
修道尼の後姿が叙情めき　十九平
父上の後姿がちゞんで来　大然佳
花道の後姿を見る座席　満年佳
後姿帯で愚妻と知つたよう　和友佳
追越して振り返らせた良い姿　妻揚子佳
後姿だけはミス日本にも負けず　美秋佳
後姿を見送る迄は無事だつた　去水人
ラブシーンの後姿で幕になり　美能留
バックシャンなんぞ見合気に入らず　一点子
片意地を後姿にまでも見せ　水堂軸
席を立つ後姿に見る憤怒　南天
後姿見入る四十の儚い瞳　一瓢
サンスーツ後はまるで裸なり　暁舟
後姿いつ〳〵までも夢でおき　満佐志
後姿だけが昔の京美人　光月
恋人も後姿で見付けられ　牛歩
狐影消然後姿の尙わびし　若柳
着替する女器用に向ふむき　莽花
嫁ぎゆく後姿へ幸祈る　初歩
優良児審査の位置で廻れ右　一歩
答へない後姿へ呑んでいる　青竹
二十四、五後姿が母に似る　摩天郎
両方が後姿へ振り返り　方大
振り返へる女を女振り返り　芳仙
逢ふてゆく後姿へ月がさし　兎山
吊皮の後姿も務め人　潮花
振りむかぬ後姿の気の強さ　葉光

流石年後姿のぢゝむさゝ　七面山
仁王尊後は只の木隅の坊　太路
後姿似て替玉に使はれる　悦子
黙否権後姿をにらませる　夜潮
後姿が犯人に間違はれ　格一
姉妹後姿も瓜二ツ　のぼる
後から去りゆく医師に目礼す　青竹
後姿見送る母と赤トンボ　谷水
大然佳闘病八年後姿は幽霊か　山雨楼
後姿酔ふた妓の後姿も僕のもの　鮎美
和友佳死のせつな水へ背中を向けて佇ち　千容
美秋佳老らくの詩に筆冴えて背は枯れる　寛虚
去水人舞の手が後姿に出る師匠　花代子
美能留地着るたびに背筋を妻に直される　右郎
一点子天恋人の後姿に癖一つ　山雨楼
水堂軸落魄の後姿を寂しかり

三等重役

藤本満年選

御機嫌の社長得意のトンコ節　格一
三等というと重役さんが酔い　摩天郎
茶を運ぶ重役客は打解ける　とよ
世と共に三等重役へお世辞いう　一路
三等重役ですから何も解らない　天明
三等重役若い社員に少し持て　朴仙佳
三等のネームで重役親しまれ　谷水佳
妓もう三等重役と見抜き　大佳
大阪弁三等重役だと見られ　方光佳
社の隅に三等重役鶏を飼い　光郎佳
重役になつて油の服ぬげず　一糸人
三等重役元はハンマー持つた人　去水地
三等というけどあごでものをいい　千容天

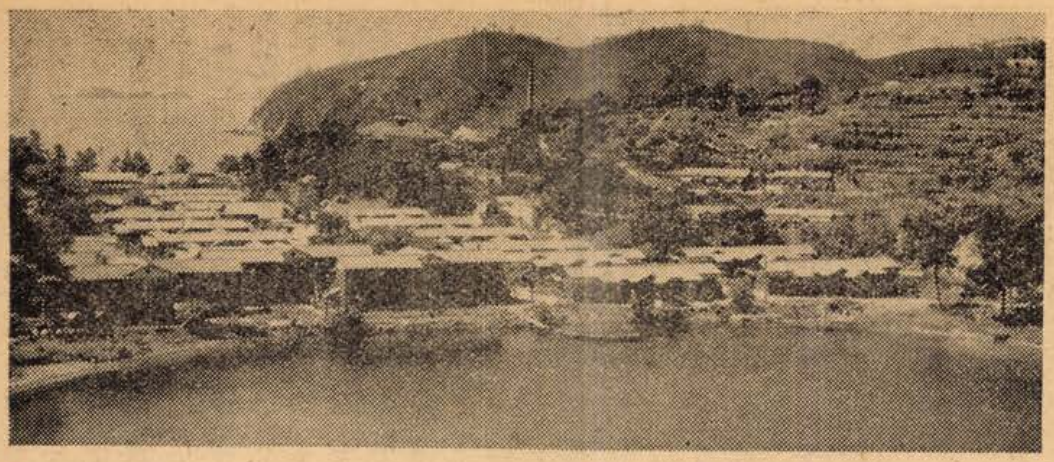
争議団三等重役つるしあげ　木魚
恐妻も知れて重役あなどられ　方大
気軽うに出雲の神になる社長　寛虚
割り前で三等重役損をする　美婦適
気まぐれな景気で重役一人増え　怠坊
重役になつて名士といはれだし　満佐志
サラリーも三等重役ほど貰い　一点子
三等重役少しも三味にのらぬ唄　山雨楼
重役といえど結局番頭です　太路
候補者に三等重役かつぎ出し　呑舟
C級の重役ヅックの靴で来る　方眠
社宅から三等重役まだ通い　莽花
重役となつたが借家住いなり　五風
三等重役手腕を買われての若さ　悦子
世襲という社長女の秘書が好き　古心
満員へ三等重役もまれて来　牛歩（大阪）
漫画になつて三等重役うれしがり　鮎美
三等重役元税務署にいてた人　太路
三等重役などと女将がズバリいい　芳仙
前社長が来れば社長がお茶々入れ　格一
社長秘書三等重役軽く見る　十九平
重役に空席が出来順に詰め　妻揚子
三等重役会社の紙で鼻をかみ　山雨楼
出張で三等重役よく稼ぎ　美婦適
定刻に三等重役出勤し　光郎
算盤を三等重役すぐに出し　木魚
売れつ妓へ三等重役歯がたゝず　暁舟
三等重役廻転椅子をうれしがり　一舟
三等重役になって女房が気に入らず　七面山
社用族三等重役だしにする　十九平
三等重役小言もつけばこまも摺る　呆声
水地社長から三等重役叱られる　太路
小粒でも三等重役社を守り　信雄

版彫刻家として有名だつた。文字香朝（京都）は同九年一月五日病歿。梅溪木卯村（岐阜）は同年一月六日永眠、柳書刊行会、柳だる研究発行人として功績を残した。吉田晩春（大阪川雑支部同人）は同年一月十七日三十才で病歿。吉田清（大阪）は同年一月二十日四十六才で他界、洋画家で川雑に表紙絵を度々寄せられた。守山守（博多拳骨吟社同人）は同十年一月九日逝く。加藤石風（津山川柳会創立者）は同年一月十七日長逝。板倉与詩雄（出雲川雑叢川支部同人）は同十一年一月六日逝く。水川浮沈子（丸亀番傘同人）は同十三年一月二日四十三才で永眠。湯本竹の家（湯田中柳風会創立者の一人）は同十四年一月十二日八十三才で永眠。沢松異天楼（愛媛）は同十五年一月十八日三十一才で逝く。今村螺炎（京城川柳三昧同人）は同十八年一月十日永眠。多田市多楼（下関川雑支部同人、がんりゆう発行人）は同二十年一月十一日病歿。

福田山雨楼編

長島を訪ねて

延永忠美



長島愛生園療養所を望む

勝景の瀬戸内海に、ぽつかり浮んだ帯の様な小島、長島愛生園は過去、現在に幾多の歌人、俳人、詩人を生み、独特の獄文学を築き、その世界では知られてきているが川柳はまだ拓けない処女林のまゝ静かに眠つている。柳友、河田五風氏は山陽新聞社会事業団理事として、常にこの恵まれない小島を訪ねる機会が多かつた。たまたま、或る日、川柳の話しが出、氏の川柳へのひたむきな、熱情にとけ込んだ入園者の一部に、川柳への関心が芽生え、川柳を識りたい希望がもたらされた。続いて「川柳山陽」「川雑岡山」等を贈つて、一層の激励を続けていた処、ついに園内に一つの川柳グループが生れ、この十月、指導者のないまゝ、二回の小句会が持たれたのでした。園の事務所でも、この燃え上ろうとする、入園者の川柳熱に対しあたたかい思いやりを、加えられて、句会開催の希望が山陽新聞へ寄せられて来た。かねがね五風氏からこの状況を聞いていた井野格一氏と忠美は川柳をもつて心の慰問にと十月三十一日の午後この三人は、たまたま園の画の審査に行く、画家諸氏と一諸に行を共にする事となり、愛生園専用バスの人となつた。車中一時間半、夕もやにつゝまれた長島を眼の前にした。虫明の港につきランチに乗替えて二十分、庶務課長の井上さん始め島の方に迎えられて、漸く夜のとばりのおりた桟橋を上り、光風荘にて観待を受けた。たまたま今日は私の誕生日で、期せずして誕生祝ともなつた。明けて十一月一日午前九時から、キリスト教会堂にて句会が開かれた。集る入園者十四名ほとんどが視力の無くなつた人、足の不自由な人、指の曲つた人達だが、お互にやさしく、いたわり助けあつて会場へつめかけ、まことに静かなうちに句会が進められた。全盲の人は筆紙を持たず、作句をその頭中に畳み込み、手の多少使える人は紙片に書き留め園の文化部長其の他、一二の人によつて夫々句箋に代筆される。私達は全く胸のつまる思いだつた。社会から隔絶されたこの人達に今後川柳が大きな希望の灯をかゝげて、この人達の心を明るうするであろう事を、考えると、私達の胸も又、明るいものがある。不自由な手から、拍手も起つて句会は終り、座談会となり、次回の来園を切望され乍ら、正午散会した。やがて、この小島におろされた小さな川柳の芽がぐん〳〵成長し、美しい緑の葉を島一杯に拡げるであろう事を信じながら。

たぬきと打止め太鼓

前田伍健

子規顕彰会発会式に私も推されて企かくの一員となりてその席上え列した。漱石と子規と同居した愚陀仏庵の跡を市が買上げる事に就て市の理事者が地価、地主との交渉など一寸話が横道の経済方面へ外れた時間、私の隣りに座つて居る子規堂のある正宗禅寺住職田中宗坦師と私が話をはじめた「この間のたぬき祭は面白かつたですな、天真らんまん、人間も、あんな一日があつてこそ生甲斐が、ありますぞなもし」「さよう、和尚さんも酔つて居ましたな、黙然博士も笑い崩れて居ましたが、あの謹厳居士も、たぬきに、もみほぐされたもので、しような」「私は愉快でおどり出したくなりました

謹賀新春

川柳雑誌社

麻生路郎
麻生茛乃
麻生梨里
麻生POE

川雑下關支部

藤田蘇人　坂田良坊
岡藤市　藤井米三
石川侃流　浜野みつる
向田妻揚子　山田伊三男
多田ほなみ　中士居土筆坊
中村九呂平　斉鹿のぼる
弘津柳慶　住沢紫蓮
国弘半休門　伊織柳坊
今岡忠朗　依田稲穂
加藤司楼　三浦十郎
高橋かうたる

大淀区長柄中通一ノ四一
山崎帆加夫

島根県簸川郡平田局区内
平田町灘分一八二二
久家代仕男

よ」「時にお寺の八百八狸の本尊奥平のお墓も、どうです、子規堂と共に宣伝しては、頼朝公がお若い時の頭がい骨を宝物扱いにするお寺もどこやらにあるとか、又た皇国の興廃この一戦の字を東郷さん若かがきの筆ですと骨董屋さんが云うた肚で奥平八百八狸を売出しなさいよ子規さんよりこの方が、お寺へおさい銭があがりますよ」宗坦禅師にや〳〵笑つて「或はねーそんな世の中ですからね」と火鉢の上で念珠を、揉む、私の左横の柳原極堂翁（八十六才ホト、ギス誌の創刊者）は耳の遠いお方で、お隣でたぬきのお話とも勿論知らず耳のところへ手を当て乍ら「伍健さん市は何を云つているんだい」「たぬきですよ、いゝえ、土地の事です愚陀仏庵の」「そうか、讃岐の土地をどうすると云うのだろう」宗坦師と私は顔を見あつて笑つた「おかしいな」「左様おかしいですよ」あつはゝゝ思わず声を出すと、皆んなが、こちらを見た。市の理事者だけは大真面目で「では総則第一条から詮議したいと存じます」私も禅師も極堂翁もしやんと向き直つた。たぬきの話など忘れた様に……

○　○　○

昭和二十四年の暮から始めて昭和二十七年十二月で一応打止めとなつた放送川柳角力も三ヶ年半の土俵は流石に馴染も殖え、最近パネル調査では八十パーセント上々の人気、登場関取百六十余人。内に婦人も二十六名の盛況……然るに突然打止めで、ラジヲ新聞には行司の健康上とあり（其の実行司はまあまあ健康）各所からお見舞をいたゞいて、眼をパチクリの次第原因は一寸発表出来ぬが局の都合であるが、世の中には発表出来ぬ事も多くあることを教えられた。泣虫記者の本にもあるようにである。川柳文学と娯楽の中間を行く川柳角力だから四国四県柳友の協力ギセイにも大きなものがあり誠にうれしいものは柳友であると感謝して居る。大阪の某先輩柳友が屋根瓦を一枚一枚刎ね返えして飛込んで来る川柳玉のように思えたと云う評も本当に有難い評であつた、いずれ又何かの方法でと関取も行司も角力ファンも、勧進元のNHKも腕を組んで何かをにらんでおるらしい。カチン、（拍子木でないすいがら筒をきせるで叩いた音）カチン……。

川柳雑誌

バックナンバー御入用の方は往復ハガキに御希望の号数記入の上問合されたい。

私の柳友

（I）

異種の電氣

藤本満年

福島鉄児さんは大阪弁である。「満年ハーン」と特長のあるアクセントで私の寓居を訪ねてくれる。――鉄児さんと私が相識つたのは弓削の創立句会の日からであつた。いわゆる川柳同窓会のメンバーになつてからである。私がまだ弓削に居る間は殆ど毎夜のように鉄児さんの訪問をうけた。岡山市内に転居してからも、毎月鉄児さんは弓削から定期のように出かけてくれたものである。少し疎遠になると私は督促状を出すのである。鉄児さんと私はまるで句の作風は違う、性格も違う。だが異種の電気は相求めるのである。そして切磋琢磨がある。しかし共通した一本の線は温い友情と人生への誠実であろう。

一万二千圓ベース

中村ただみ

六畳二た間の棟割り長屋、一万二千円ベース、菜ッ葉にせつた草履、Aも、Bも、Cも私の柳友は一列一体の生活、そして純真、妻君を入院させた足ではるゞ〳〵Uの川柳会へ出席して叱られたのや、夜勤の主人の食事もせずに例会へ来る主婦や私の周囲は賑やかである。川柳には金はいらぬ、階級はいらぬ、学問はいらぬ（と言つても敗戦のお蔭でこんな長屋住いにも専門学校程度はザラで、前記の主婦など女子大出だ）今私はこうした柳友を周囲に沢山持つて悲鳴を上げて居るのである。

二女のお母さん

丸尾潮花

いつでも女性の言いたい事をハッキリと言つて呉れる女流作家に石川ひさみさんがある「川雑」で此の人の句を読んで居ると、胸の中がスットするとは愚妻花代子の説である。私の柳友として十一年、川柳と共にこの人を見詰めて来た。しかしこのひとに、あんな句がどこを押したら、出て来るかと驚く程、彼女は内気である。決して人と対して言いたい事の言える女性ではない。だのに句はとてもこれが女性かと思う様な句を作る人である。私は思う、句が本当のひさみさんであると。

太陽の下で男のすゝぎもの
娘さんそれ見たことかだまされて
男ごろ〳〵とじやが芋の如く居る
いまわ二女のいゝお母さん

でいられる。

川雑出雲支部
多久和朱扇

珍味・お好み焼で
ちよつと一杯の店
たいこばし
住吉さんへ初詣りのお帰りにお立寄り下さい。
幽玉
南海本線住吉公園駅東出口東ノ辻北入ルスグ

澤田四郎作
小児科・沢田医院
大阪市西成区出玉本通一ノ一三

一品料理と生そば
グリル　芝鶴
上六キヤピトル映画館　東三軒目

直截の崇り

麻生路郎

私は物を直截に云う癖がある。ソレが時々祟る。一例をあげると、昼時の来訪者に「飯は？」と聞く。「喰べて来た。」「そう。」と云つて重ねて聞かない。ところが世間ではそれではいけないらしい「喰べて来た？　それでも少しぐらい喰べられないことはないだろう。喰べろ〳〵。」とムリに食卓に引据えなければエチケットでないらしいが私にはそれが出来ない。私にはそれは一つの暴力としか思われないのだが、そうしないと満足をしない世間人のあまりに多いのに常にウンザリさせられる。一つの真理を摑むための論議なら相当ネバル必要もあろうが、飯を食うたか、食わぬかと云うこと、まだなら喰べないかと云うことに対して、ムリに何回もすゝめさせてから喰べる必要が何処にあろう。飯を喰べたか、喰べていないかを聞くことはまだなら提供してもいいと云う一つの好意であつて、決して虚礼ではないのである。ムリにすゝめる方が、よつぽど非礼であると私は思う。単に飯だけでなく、世間にはこんなことがザラにある。

私に斯した直截の習癖？　があるのは、少年の頃、親戚へ使にやらされた時、ぜんざいを喰べさされたことが原因だと思う。私はこどもの時から間食を殆んどやらないし、殊に甘いものは嫌いだつた。それが一碗のぜんざいをすゝめられたのである。私は箸を取ろうとしなかつた。ところが、遠慮をしているものと思つたのかムリに喰べろ〳〵とすゝめられたがイヤなものが喰べられる筈もないので困つた挙句、「きらいです」と正直に云つてしまつた。しかし、先方はその正直を買つては呉れず「嫌いなことがあるものか」としつこくすゝめる。私はどう云つたら喰べずにすむのかがわからないのでなさけなくなり、とう〳〵涙がボロ〳〵頬を伝つて落ちた。しかし正直は強かつた。私は遂に喰べなかつた。そしこの正直は私の一生を貫いた。「喰べて来たか、そうか」と云う直截な私の態度はこの正直が生んだのであるが、日常の多忙は更に直截に拍車をかけているようである。

しかし、この直截は、まわりくどいことの好きな人達によつてしばしば誤解を招き、そのこと以外のことにまで祟ることがある。正直に暮らすこともなか〳〵面倒くさいことである。

正直がなんのたしにもならず
死に

と云う私の旧作があるが、何れはそんなところへ落ちつくのであろう。

電せん

政田了一

ぼくは、きのうふしぎなことがありました。じぎようがすんでかえりました。はしのとこまでかえつて、川を見ると、電せんが川へうつゝて、ゆれていました。ふしぎに思つて、上を見て見ると電せんは、ゆれていませんでした。ふしぎになつて帰つてしばらく考えていると、川の水がながれているからでした。

（筆者は政田大介氏長男九才）

◎前号正誤

▼五頁二段十九行目富岡淡。水は淡。舟。十二月号一五頁二段二四行目、四角の次に四面を挿入、一六頁一段九行目、宗高ハッは八。茶。と訂正、同じく十二行目、岩垣俊雄は日本。村。と訂正、二五頁一段一八行目の隣り合ひを隣り合いと訂正

▼十月号一五頁一段五行目、記録虫の記を挿入▼十二月号一七頁二段椙原一善氏、佐々木告天子氏の作品は川柳塔に発表を間違つて近作柳樽へ発表したことをお詫びする

謹賀新春

川村好郎
大阪府泉北郡高石町北四六五

木村孤浪
平塚市馬入二九〇九

里田一ン十
芦屋市精道町九六

川雑玉造支部
清水白柳子
大阪市天王寺区宰相山町一四七

菊沢小松園
大阪市阿倍野区王寺町三丁目三四番地

川雑大和支部
上田翠光
奈良県宇陀郡三本松村向淵

西垣錦風
奈良県生駒郡伏見村字菅原九〇〇番地二八

柳界展望

▼本社主催師走川柳大会は十二月十三日午後五時三十分から下寺町の光明寺で開催され、近畿の各支部対抗句戦の復活で賑つた▼南区医師会文化部川柳会は十二月十六日午後七時から兎庵居で開催▼大阪逓信病院忘年川柳会は十二月廿日午後二時から梅ヶ枝町の梅ヶ枝寮で開催▼南海電鉄川柳会は十二月廿二日午後六時から粉浜の親和寮で開催▼川雑阿倍野支部句会は十二月廿六日午後六時からアベノ橋近畿直営地下食堂で開催▼葉光氏母堂追悼句会は十二月二十日午後六時から葉光居で開催▼山陽新聞読者文芸川柳大会（岡山市）は十二月七日午前十時から開催。以上何れも路郎主幹出席▼交通局川柳会（大阪）は十二月十二日午後五時局病院五階で忘年句会を開催▼川雑岡山支部句会は十一月十六日山陽旅館で開催▼堺市民川柳大会は十一月廿三日午後一時から堺川柳人グループ主催の下に高須神社で開催▼青蛙川柳会（伊丹市）の師走句会は十二月五日午后七時半から三菱電機健保会館で開催▼川柳日の丸忘年句会（鳥取市）は十二月六日に開催▼大阪市文化祭市民川柳大会は既報の如く十一月十六日午前十時から毎日新聞社講堂に於て開催され盛会、下記の人々が入賞した。「興論」戸田悦子（手内職興論の声を強く聞き）「地下鉄」泉比呂史（地下鉄に日毎きびしき貌創る）「生姜」博多成光（妻の指思ふお昼の紅生姜）「踊」真鍋一瓢（押し花がひそむ踊の荷が戻り）以上教育委員会賞「読者」下地実坊（百万の読者の中に僕も居る）「商人」岡田紘一郎（商魂の或日笑うて済ます損）「工員」山下清祿（鉄けづる匂ひと生きて来た白髪）「荷」岡田紘一郎（失業の眼に人と荷がよく動き）「顔」博多成光（横顔のヒステリーとも知的とも）「裏門」永田都詩子（裏門へもう来る時分乳が張り）以上市長賞▼立太子式奉祝新川柳五十年記念第六回京浜川柳大会が十一月二日浅草伝通院で開催▼米布川柳句集「やなぎ行李」がハワイホノル、市のウイロー社から出版、B列6号一三四頁、非売品▼谷孫六（矢野錦浪）追悼会が十一月十六日東京下谷公会堂で催され吉川英治、川村花菱、川上三太郎氏等の思い出話があり続いて追悼句会が開かれた▼川上三太郎氏（東京都）の長女雅敷さんが十月三十日に華燭の典を挙げられた▼富士野鞍馬氏（東京都）は十月から宝酒造会社の三十年史の編纂をされていると。

写真説明＝ウイロー社二十周年記念祝賀晩餐会前列向つて右より青茅・のぶじ・常英・溪芳・晶子さとみ・樫風・法雲・宙夢　二列目　貫一・笑有・加里比・快夢起・大藏・珍栄・阿舟・草一郎　玉萩　三列目　政亥・細尾・純香　凡一・不二夫・熊次・隆彦・晩翠　あきら　四列目　柳葉・泉水・沙兆・魔花麗・葛彌・伯楽・峰雪・暁舟

川柳雑誌社

京都支部

平岩司郎　村松夢裡
今田ソ海　長尾案生子
井ノ下秀人　大鶴喜由
井ノ下晴芽　高岡薫
石川牛歩　田中千潮
岩見とくじ　田中烏雀
小林亀一　八木迷々
溝川ちか子　柳本憲一郎
溝川きよし

（ABC順）

1953年　元日

明けまして新年おめでとうございます
併て相変らずの御芳情をお願ひ申上げます

南区西櫓町二一
脇田勇
道頓堀川柳社
脇田梅子
電話南㊱三二二九

海の幸めざす船出へ金の波

雑川柳

いのちある句を創れ

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

雑川 阿倍野支部句會（大阪市）

十一月二十七日　於近映直営食堂

須崎豆秋報

投売屋キズのあるのを自慢にし　ひろし
鉢巻をまた投げ売が締め直し　葉光
無茶苦茶で御座いますと投げて売り　豆秋
ホントウに投売をする店年の暮　光風
労資共ゆずらず朝の陽がしみる　一香
寝不足の顔がゆがんでいる雨戸　圭三
寝不足のまゝで約手を書かされる　小松園
寝不足の大阪駅にそつと下り　貞女
舌づゝみ後味を見る音になり　唯義
後味の甘さ二十の恋であり　貞女
朝めしも喰はず後味わるく出る　梅里
コーヒの後味が好きインテリさ　亜鈍
ぼろくそに言ふた後味ごろり寝ろ　春柳
へそくりを作るにインク消しがいり　一香
へそくりの札はキツチリとてなかけ　春柳
へそくりへ旦那は足して買うて呉れ　亜鈍
へそくりを借りる旦那となりにけり　豆秋
へそくりは聖書にはさんだ二千円　野介
倫落の枕よ感傷もなき夜毎　多栄
膝枕芸者線香をかせぐだけ　夕霧
新婚の宿の枕がまばゆすぎ　ゆづる
上京の母遠慮ない国なまり　卓児
上京の父ストリップ見るとこう言わず　茶三
金策の東京駅の雨へ降り　小松園
上京の筈が別府の湯で出会ひ　梅里
上京の夢はそのまゝ原稿紙　晴峯
東京行三等そこが僕の席　日本村
上京の目に浅草のまぶしい灯　紫香
上京の母へ浅草芝上野　野介
女優になると上京したがそれっ切り　好郎
金送れ金送れ父遂に上京す　同
上京の先ず呑むとこを探すなり　路郎
あてのない上京白井喬二を訪ね　同
上京の酎をのんでるとは云はず　同

不朽洞偶會（大阪）

十一月廿八日　丸尾潮花報

母さんが女史と呼ばれて面映ゆし　文蝶
カクテルへ女史の酒量のあなどれず　潮花
女史酔へば男の様な声を出し　淡舟
度のきつい眼鏡で女史のよくしゃべり　紫香
中性をにほわせ女史は登壇し　春柳
女史の目がギクリ光つた社会欄　博也
あばたまで冷たく見える女史であり　翠骨
未亡人としての議員に起つ気なり　梨里
婚期いつしか過ぎて女史となり　愛論
末席が今は時めく女史となり　摩天郎
台所女史は女中にまかせとき　春柳
階段も同じ歩調で女史は降り　紫香
靴下をはくとき女史も一女性　翠骨
ロマンスのないのを女史は淋しがり　路郎

雑川 櫻島支部句會（大阪市）

十一月六日　於日立造船所

丸尾潮花報

なんや停電かと按摩もんである　一球
天災でなければストで灯を消され　一瓢
停電の何処かで猫が変に鳴き　秋花
停電をさせて賃金またあがり　花奈女
停電へ車掌一服吸ひに降り　清潮
停電の中で女の笑ひ声　ひさみ
停電になつて稽古屋さわがしく　潮花
片袖は理想通りに出来あがり　巨船
片袖を縫ふて裁台屋にする　花代子
片袖を母が脱がせる盆踊り　定美
吊皮をもつ片袖が陽にもへる　花子

雑川 出雲支部句會（出雲市）

十一月十九日　於森山壮居

皇太子負荷の重きを意識され　代仕男
平和への希望をのせて立太子　峯雲
鼻唄を止めて二人へ嗟ばらい　山僧
鼻唄の嫁へ時世が羨まれ　まさる
居眠の母に秋日はしみ入りぬ　坡青
居眠にまで桃源の独り者　十六
眠るまいとしても読経長すぎて　壮
居眠の父起すまいしのび足　柳作
復縁の行李が届く人力車　緑之助

雑川 岡山支部句會（岡山市）

十月十二日　於山陽旅館

藤本満年報

ちと腹を立てた鋏が切り過し　千石
洋服屋鋏の先で物を言ひ　七面山
裁ち鋏男を凌ぐほど稼ぎ　満年
こんな所にあつた鋏をみな捜し　三林坊
二つ三つ鳴らして鋏入れてゆき　笑坊
屋根を刈る鋏大きく構えられ　魚女
運のない枝が鋏に睨まれる　笑気坊
禁酒してちやぶ台何かものたらず　利佐
ちやぶ台をつたい歩きが巡つて居　一仙
ちぶ台で内輪の客はもてなす気　秋芳
ちやぶ台へ友はあつさり坐り込み　たか代
ちやぶ台を机かわりとする生活　古心
ちやぶ台を横目にネクタイを解き　夢介
ちやぶ台を二へんに使ふ子沢山　十九平
ちやぶ台のおかずも月末らしうなり　美婦適
人妻のふと手に職がほしうなり　九坡
人妻という間隔で連になり　青果
人妻の罪三面を広うとり　三葉
人妻の親切すぎたのがたたり　方大
人妻となつて昼餉の味気なし　恵二朗
人妻へたしなみという猪口をさし　舌郎
人妻は男の下駄もつゝかける　格一
人妻と歩き疲れた朧月　風来子
洋服を着替える度に羽根を買い　牛耕
赤い羽根押しの一手が売りつくし　風来子
十円で知事から買つた赤い羽根　十九平
此の頃は金策ばかりスクーター　八ッ茶
スクーターわが道という音で去に　久米雄
交番が前で気軽に留守にする　五風
交番をさがしてそれから道を聞き　美能留
交番へ家庭のボロをさらけ出し　千容
酔ひざめの水交番でよばれて来　大甲輜

小児科
内科
性病科
安岡醫院
安岡三四郎
道頓堀・日本橋南詰東へ半丁浜側
電話南㊱三二四六

阪田謄写版
大阪市北区芝田五丁目二
株式会社 阪田商会
電話 福島五六三一
五九九一番
一四番

雑川 下關支部句會（下関市）

十一月九日　於 下関駅　石川侃流報

咳きこんで無理な煙草を投げ捨てる　蘇人
子の咳が気になつて見る育児篇　仁美
女給からきいた言訳妻へ言ひ　忠朗
先方も入智恵らしい電話口　九邑平
入智恵をする女房は呼びとめる　米三
居留守する子の応対に汗をかき　妻楊子
新聞のクイズに母も智恵を貸し　つとむ
一級酒ときいて盃持直し　茶目坊
竹ざをの熟柿子供が下でまち　伊三男
喰ひたいが熟柿も母は売ると言い　みつる
稲を刈る間熟柿を鎌でよせ　ほなみ
青空へ熟柿が一つ残される　柳鬱
くたびれた鞄を抱いて十二月　侃流
土曜日の映画へ続く提げ鞄　藤市
折鞄毎朝艶を拭ひてゆき　かうたる
玄関で坊やと鞄交換し　伊三男
混雑へ鞄が肩を越へて行く　土筆坊
税吏かと問はれてハット見る鞄　柳坊
気がかりの鞄枕にした夜行　ほなみ
解答をされてうなづく子のクイズ　土筆坊
日曜のクイズへ一家総がかり　半休門
パチンコとクイズはやりで子等せわし　良坊
賞品は宣伝兼ねた製品ばかり　忠朗
年寄りに譲る火鉢の暖かさ　司楼
非国民と言われた銅の火鉢出し　柳蛙

雑川 京都支部句會（京都市）

十月十六日　於 仲間寺　村松夢裡報

栗五升せめて丹波の送り物　いくを
栗むいて余生たのしく祖母の顔　ちか子
母想ふ一粒栗を夜の掌に　紫蘭
送られた栗に味覚の秋を呼び　夢裡
栗をむく親子に秋の夜が更ける　義行
寿司開く栗の毬散る奥の院　蘇海
人間の弱さ悪日に合ふて酒　折草
銚子持つ女将悪日と慰める　薫
勝負師の弱気悪日と覚悟する　誠史
日蝕へ今日も悪日の雲駈ける　草之助
悪日を忘れさせない松葉杖　キヨ
次の間のほかに間のないわび住ひ　親生
次の間の御用意が出来開く襖　鳥雀
次の間へ渡る廊下の月明り　朝路
次の間で昼飯ほしい猫が鳴き　亀一
エキスパートの消ゆる次の間　迷々

雑川 大聖寺支部句報（石川県）

十一月十四日　於 光郎居　野村味平報

社長より守衛の胸がそり返り　笑平
投げキッスもう向うの辻を曲がつてた　味平
投げ出した命へ親も許す仲　とよ
目通りがかなわづ淋しく老いてゆき　雅子
巡礼のお鶴にラジオあるならば　和子
知つた声行水の娘のあわてやう　光郎
再軍備人的資源を高く買ひ　酔羊
若い日の自慢又かと聞流し　明石
口だけは時世に合うた事を言ひ　桃園
ぶさいくな花嫁姿も文化祭　貞人
嫁ぐ日も近く慌てぬ娘と変り　四苦峯
公葬のすんだ夫が門に立ち　柳月
人違い慌てゝ背中の子をあやし　凡骨
戦時壁未だ消え去らず寺の塀　茂
電報へ中々起きぬ寺の門　文子
極楽へ行きたい寺の寄附を出し　春巣
亡き母を云えば泣き虫リズム変え　斗志
泣き虫で通り泣くのをほつとされ　美秋
泣き虫へ乃木大将の話する　木人
選挙権出来て演説聞き歩き　善子
ホルモンを飲みハンストの列におり　観月

雑川 詫間支部句會（香川県）

大西迷窓報

金がないので売店でしやべるだけ　迷窓
売店で売らないビラを吊つてあり　風来子
これ以上脱ぐものない昼下り　嘉子
病院が近く一寸の事で行き　信里子
病院へ簪飾つて行く軽症者　烈女
父ちやんのパチンコキャラメル待つ子供　家里也
パチンコで坊やの土産かせぐ父　敏子
散髪のお釣パチンコして儲け　寛子
パチンコへ女房を遂に誘ひ込み　久峰
姑の留守に昼寝が長くなり　正恵
大びらに昼寝が出来る夜業の身　中納言
選挙戦昼寝の坊やの眼を覚し　きよ子
健康のための昼寝と云ふて置き　九坡
若い日の希望は虹のごとく消え　固定子
失恋をしたけど希望失はず　百合香

交通局川柳会 天王寺支部（大阪市）

十月二十三日　於 天王寺支部ポックス　福島正則報

天才の既に病はあつかりき　正則
天才の記事の大きい地方版　和樽
天才のお蔭で親は使はれる　竹声
天才と云われて一生コマ廻し　京の子
家を出た娘を探す便りが来　得多朗
縁談の便り二度読み三度読み　○男
温泉の便りそのまゝ出しかねる　義雄
どんなにか待つた便りで夜が更ち　観月
皆顔を上げて聞いてるよい便り　良一
初めての月給封のまゝ渡し　淡舟
片袖は吾がものとなる月給日　誠一
月給日やつと思いが叶いそう　喜章

南海電鐵川柳會（大阪市）

九月例会　友淵貴山報

真相をゆがめさせてる金の嵩　黒天子
真相へ歯切りしたとて平社員　淡舟
真相をぶちあけあいの総選挙　伯州
真相を書くなと頼む名誉職　雄声
真相はどうあろうとも過去の事　博史
信ずればこそ信じている奇蹟　古方
好敵手武蔵の例を聞かされる　幽王
好敵手だけに選挙費かさむこと　摩天楼
もう年だなとよわみを見せはじめ　路郎
真相を喋ればアカと疑われ　水堂
浮貸がばれて奸智のほどが知れ　梅志
せめてもの遺書に真相匂はせる　貴山
母親の忘れるくせをもうせめず　梨里

東京そばと
灘一どすじ
アベノ橋地下映画食道街
梅里の店
大萬

★大万川柳（第廿二回）を募る
兼題「初詣」路郎先生選
締切・一月十五日　句數五句以内
発表・一月廿一日（店内に掲示）
御投句は大万宛・どなたでも

川雑 淀川支部句會 （大阪市）

十一月六日　於　六竜子居

武部　香林報

安定所胃の腑へ朝の空気泌み　花村
胃袋にじんとこたへたコップ酒　都詩子
もう一度ねむれぬ枕うら返し　若菜
手枕を立たすラヂオの相場欄　香林
出直した社会の風も冷え冷えと　六竜子
出直せと役人にべも艶も無く　香林
出直しの眉は朝日の様に晴れ　天貧

南区医師会 川柳同好會 （大阪市）

九月三十日　於　一哲居

坐る婆に尻向けられる汽車の旅　比呂史
一人旅若い夫婦に悩まされ　鳥耕
社長然と箱師も乗りし特二等　弾正
総選挙又汽車つけてやる停めてやる　捨舟
旅馴れて汽車弁次の駅を待ち　生々庵
どの駅も蛙の声の終列車　瑞川

無月でも飲むのを止める訳でなし　一哲
匙加減保険患者に疑はれ　迷路
ふところの診断がつき匙を振り　兎庵
ワンマンのちょん過ぎた匙加減　珊枝郎
すぐ癒るように云うてる匙加減　路郎

十月二十一日　於　珊枝郎居

皺一つ見付けた妻の大騒ぎ　兎庵
白粉に哀れ老妓は皺かくし　迷路
皺のないズボンに何時も牛耳られ　一哲
脊伸びしてさておいむろに位置につき　太希志
閑寂に脊伸びして見る独り者　鳥耕
ハイヒールへこつちも脊伸びして写し　捨舟
網棚へ妻の脊伸びをすけてやり　生々庵
脊伸びして（I）さんに抱かれてる　弾正
お酌だけ一わたりして女将去に　生々庵
末席は手酌でビッチ上げている　珊枝郎
お流れの酌は手近でしてもらい　比呂史
まアやれとボスは二号に酌をさせ　路郎

體溢川柳句會 （貝塚市）

十一月九日　於　千石荘集会室

昔なら陣笠止りが車中談　青兎
屑拾ふ身なり昔は語るまい　六竜子
むかし〳〵生んで表彰されました　雅柳
チャルメラのラッパ昔の匂して　たけし
一円の浴衣さへ躊躇した昔　芙美子
子供もう昔々ぢや寝て呉れず　一瓢
この人はお転婆だつた写真帳　義一
淋しさを古歌でなぐさむ重症者　美代吉
子の喧嘩ママの声して強くなり　須美子
娘の声が亡き妻に似る年となり　玲子
録音機要らぬ声まで記録する　よしひこ
大きな声出しなさ赤ん坊指差され　一蝶
ハッキリと聞いた外科医のひくい声　於久良
部屋中を起して寝言向をかえ　無骨
留守番が大きな声でうたひ出し　柳叟
臨終のこれが最後の母の声　春柳
生きるだけ生きる重症患者云ふ　靖一
子の寝顔明日から生きる希望わき　一山人
生きるため肺をとるため入院し　博志

生きてゐる金魚の鉢へ菊をさし　百合子
生きる為こんなに赤く唇を塗り　乃歩男
片肺になつても生きる夢を持ち　千舟
マイシンの効かぬ肺で生きている　朱人
処女一人話が合はぬクラス会　耕平
ハッラッと球を蹴つてる胸のゆれ　瓢之助
処女らしい品が募金の羽根をうり　泉松
デパートを廻つて奥様日が暮れる　さぎす
剰りの間を店の鏡に写して見　梵鐘
買物籠今日は旦那のみえるかさ　甲馬
珍客へ買物籠の明石鯛　鮎美
市場籠菊も一輪入つてる　都詩子
執事まだ殿下の呼び名捨て切れず　若柳
臣籍に入られ気安い殿下なり　没食子
アプレの娘殿下をハンサムボーイと云ひ　喜好
フラッシュへ殿下としての立姿　潮花
一大事慌てる男軽視され　初奈里
一大事最後の背広売りに出し　一峰
ヘソクリの場所を忘れた一大事　生々庵
エンコした踏切汽車がもう間近か　三司
不渡りの社長は行衛不明にて　野介

編輯室から

★新春号のインクの匂いが漂う春の部屋で誰れ彼れの句の中に溶けこむことは何よりありがたいことである。★本誌も好評に次ぐに好評なので力の入甲斐があると云うものゝそれも内容の充実さ、刊行の正確と迅速、誌代の低廉なのを認めていただいた結果だと思うと大きな欣びを感ずる。一九五三年の春は私の川柳生活の五十年の年でもあるので、一段と努力する覚悟である。★本号は原稿がフクソウしたので、福田山雨楼氏の「川柳大学」其他を次号へ割愛せざるを得なかつた。★本号の好読物として幽王妄夢梨里三君の鼎談を提供した。★新春交歓広告に好意を寄せられた各位に深謝する。（路）

不朽洞会から

▲桜川不水氏（下関市）は七月下旬大牟田の三池港を出帆、印度へ行き約三ヶ月半振りに種子島が見えるとこまで、帰つて来たと九州の南端から十一月九日に通信があつた。十一月十五日には北米へ向けて出帆するので正月は太平洋の真ン中で迎え、北米からは小麦を積んで又印度行きとなり、日本へ着くのは三、四月頃だとのこと。▲水谷鮎美氏母堂エイさんが十二月一日午後六時四十八分に永眠された。行年八〇歳。謹んで悼む。なお五日午後一時から二時まで自宅尼崎市字口開一八一で告別式が執行され、不朽洞会から路郎先生をはじめ生々庵夫人、夢裡いわを、水客、紫香、剛骨、愛論、豆秋、竹荘、香林、梅里、春柳、里十九、三司の諸氏の顔が見えた。▲田村藤波氏（岡山県）は勝田郡勝間田町に川柳熟が上つたので指導に行かれているとのこと。▲水谷竹荘氏は十二月六日信州の旅情を探り、松本では石曾根民郎氏と柳談「名物のそばを味う途中下車」の句信を寄せられた。東京へ廻遊して帰阪されると。▲中山中納言氏（香川県）は観音寺の病院で盲腸の手術をされ、入院中であるが、岡山の山陽新聞読者川柳大会には出席出来る程に快癒されるとのこと迷窓氏からのたよりがあつた。一日も早く快癒を祈る。▲細野国定子氏は福岡県八女郡下広川村当桑、野田忠次郎方へ移。▲河村日満子氏（鳥取市）は八月以来お子さんや奥さんが病臥されてお困りの様子一日も早く全快を祈る。十二月六日には日の丸川柳会の忘年句会を街の川柳家を交じえて開かれる由。▲尼緑之助氏（出雲市）は予備隊誘致と建設準備で多忙な日を送つていられる由、なお川雑出雲支部は森山荘君が元気で機関車をやつてくれているとのこと。▲種瓜平氏二女百枝さんが十一月廿二日午前四時卅分に永眠されたお悼み申上げる。▲須崎豆秋氏（大阪市）は迎春と共にパチンコを止め川柳ひと筋に勉強のやり直しをされるそうだ。▲市場没食子氏は十二月から特別会員に種別を変更された。

新会員紹介

十二月

馬場夢生（滋賀県）正　春巣氏推薦
永田六竜子（大阪市）正　白柳子氏推薦
村上ゆづる（豊中市）正　紫香氏推薦

★★ 謹・賀・新・春 ★★

川雑 日立櫻島支部

中井青花
坂本潮雀
伊藤定美
大塚一球
稲葉鳩花
眞鍋一瓢
手島（一舟改）巨船
下山清潮
山口秋花
野本呑水
石川ひさみ
坂椿
丸尾潮花

大阪市交通局川柳会

病院幹事
北川春巣
天王寺幹事
富岡淡舟
鶴町幹事
浜畑胡蝶
加藤ライト
松下小柳子
福島正則

川雑梅田支部（イロハ順）

岩田一夜　石岡正司
長谷川三司　横田方眠
永田里十九　中塚夢生
真鍋雨水　藤本春夢草
樋口恵水　森石竹
幹事　水谷鮎美

川雑詫間支部

大西迷窓
中山中納言
安部寛子
香川水青

川柳日ノ丸会

鳥取市富安三八〇
日ノ丸車体工業(株)内

河村日満子
田中遊星
岡島芳道
武田粗粒
武田貴美女
羽野朱雀
福田たかし

大阪逓信病院 烏ケ辻川柳会（イロハ順）

市場没食子　井上露芳
池戸桃村　橋本幸夫
橋本峰春　西辻竹青
西川恵風　西口比呂志
尾崎方正　若林草右
多田禿天　吉田斜水
津村神峰　中谷葉菜子
山本信陽　小沢史葉
足立春雄　水谷竹荘
木村喜男　幹事　北川春巣
森下愛論

川柳雑誌社 淀川支部

大阪市東淀川区三津屋
北通四丁目二九番地

西森花村
木村水堂
鈴木天貧
永田都詩子
武部若菜
武部香林

戸田古方
正本水客
黒川紫香
阿万々的
間島青丹子
村上ゆずる

南海電気鉄道株式会社 川柳部

川柳日ノ丸会

鳥取市富安三八〇
日ノ丸車体工業株式会社内

戸倉普天

兵庫縣氷上郡沼貫村小野

喪中に付き年始の御挨拶を遠慮さして頂きます
昭和二十八年元旦

水谷鮎美

尼崎市西字口開一八一

福田安夢

大阪市西成区北吉田町二〇
ひまわり社

★★ 謹賀新春 ★★

川柳雑誌社岡山支部

岡山市下出石町六二

不朽洞会員

藤本満年　浜田久米雄
逸見灯竿　鈴木九波
大森風來子　直原七面山
福島鉄児　服部十九平
大森娯句樂　延永忠美
大森苑女　大倉四案
水田千石　中村ただみ
木村千容　田垣方大
水谷谷水　椙原一善
田村藤波　峰尾魚々
岡田夜潮　中谷仙坊
坂井三葉　政田大介
臼井三林坊　太田又州
岡村牛耕　本田惠二朗
井野格一　藤本茶々

平和文藝会
政田大介
外一同
岡山縣赤磐郡軽部村

角一川柳白鷺会
大阪市福島区鷺洲中二ノ五
角一ゴム株式会社内

川雑出雲支部

原独仙
森山壯
曾田大朗
多久味朱扇
久家代仕男
野村岬月
尼絲之助

小倉へとち
大阪市西区江戸堀下通一丁目八番地(東江ビル)
電話土佐堀(44)四六一四番
貿易商　永瑞行気付

大坂形水
大阪市東区糸屋町一

川雑ハワイ支部
ウイロー社
同人一同

高鷲亞鈍
石井白面人
大西野介
亀山晴峯
益永貞女

特殊紙器工業株式会社
大阪市阿倍野区晴明通一

川柳不朽洞會

指導　木村孤浪、麻生路郎、戸田古方

賛助　水谷鮎美、池沢楽居、西尾栞、長谷川一徹、市場没食子

―維持會員―

長野晴浜、藤村作、福田山雨楼、清水白柳子、中田守雄、寺井鋭々、鈴木九坡、白川明吉、前山北海、夷一笑、中村祐吉、古川魔花麗、小川恒明、高安六郎、内藤草一郎、浪玲之介、田中辰二、三輪晩翠、藤村雅光、徳永雅美、岩崎愛二、村松夢裡、武部香林、大坂形水、大森風来子、上田春柳、大森娯句楽、木村千容、田垣方大、鈴木天貧、服部十九平、間島青丹子、横部牛歩、東喜久堂、阿万万滴、林野甦光、家本富至、山本葉光、杉山一貫、中村ただみ、高山朗笑、西辻竹青、飯降白香、田中遊星、山田鳥荘、永田六竜子、水本無盡、村上ゆづる（十二月末現在）、中内翠芳、西いわを、水田千石、中田琴雄、長野井蛙、内藤草一郎、小川恒明、逸見灯竿、菊沢小松園、山野星登、富岡淡舟、福島正則、福本翺骨、谷内一草、布村南扇子、大倉四案、松川杜的、榎南夏六、山田季賛、馬場夢生、石井白面人、大西野介、黒田久米女、河村瑞川、稲葉鳩花、布施筑川、亀山晴峯、藤本茶々、木村無名林、下山清潮、尾崎方正、山根白星、塩浜一路、田中鳥耕、本田恵二朗、桜川不水、種瓜平、藤原虚水、真鍋一飄、渡辺孫拙、益永貞女、飛芸春風、浜田久米雄、好崎申仙、

洞友　鳥山一歩、井上湧三、木下幽王、森下愛論、荒木哲水、沖野岩三郎、北林松代、福田妄夢、太田良子、那谷光郎、亀井晟、宮田不二、中島鉄洲、岸南柳、山中志乃布、野村味平、桑原養痴園、木村水堂、田村修、西垣錦風、新川博也、松井可笑、成瀬月仙、膳所新三、川村好郎、尾緑之助、松江梅里、若林草右、花岡英子、山路閑古、安川久留美、築山快夢、永田里十九、水谷竹荘、丸山弓削平、足立春雄、八木摩天郎、前田伍健、小田沙兆、高田抱逸、小橋隆如、直原七面山、黒田笑泉、有働芳仙、福田丁路、水谷谷水、柴谷宰二郎、市岡暁舟、杉谷湖山、吉田圭井堂、狩野燕子、上林粗影、大西迷窓、佐々木告天子、蛭子省二、増田耕民、石岡正司、地倶山風楼、延永忠美、浜畑胡蝶、峯尾魚々、麻生葭乃、三鴨美笑、西森花村、田村藤波、橘本緑雨、林盃丘、国弘半休門、佐野卜占、白砂旋風、高鷲亜鈍、河村日満子、阿形一杉、岡田夜潮、沢田四郎作、東野大八、

―止會員―

吉田水車、大西八歩、小西無鬼、大鶴喜由、家沢莽花、黄瀬美秋、田代尋四、坂田良坊、石川侃流、中谷仙坊、坂井三葉、大森苑女、政田大介、中山中納言、臼井三林坊、安倍寛子、青柳扇子仙、

不朽洞會員

―特別會員―

中島生々庵、正本水客、須崎豆秋、石曾根民郎、奥村丹路、黒川紫香、野本呑水、姫田夕鐘、戸倉普天、丸尾潮花、土井文蝶、福島鉄児、黒木弾正、上田翠光、北川春巣、小林文月、直原湖月、牟田一哲、岡村牛耕、南捨舟、安倍寛子、

一九五三年の新春を賀し併せて

各位の御多幸を祈る

川柳不朽洞会

募集

課題吟募集

コップ酒（十句）須崎豆秋選
一泊（十句）上田翠光選（一月廿日締切）
招待（十句）高鷲亜鈍選
朝寝（十句）友淵貴山選（二月廿日締切）

毎號募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月廿日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　第八卷　第一号

（載轉禁）

定価　四〇円
送料（四円）
半ヶ年　二六四円
一ヶ年　五二八円

昭和廿七年十二月廿五日印刷
昭和廿八年一月一日発行

大阪市住吉區帰内方代西五丁目二五番地
編輯兼発行人　麻生幸二郎
大阪市住吉區局内方代西五丁目二五番地

発行所　**川柳雑誌社**
振替口座　大阪七五〇五〇

昭和廿七年二月十日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）　昭和廿七年二月廿五日印刷納本　昭和廿七年二月廿八日発行

THE SENRYU ZASSHI

NO・308

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

恵方詣とは…

恵方（えほう）とはその年の歳徳神の方にあたります　つまり一年の吉方をいい陰陽配合して一年の間万物を生ずる徳のある方のことで　禁（たたり）神の巡遊する位置に当らぬ方向です　一名「明き方」ともいわれています

来年の正恵方は　丙（ひのえ）（南　東）で近畿日本鉄道の沿線に当ります　お正月には近鉄沿線の神々へお詣りになつて一年の福徳をお授り下さい

大和　三輪明神　大神神社
宮司　中山和敬

生活と文化を
むすぶ
マツサカヤ

結婚式場 長生殿 8階
美容・着付から披露宴まで

文化クラブ 7階
藝能の綜合文化センター

松坂会館 7階
施設完備の藝能ホール

お好み食堂 7階
洗練された味覚と風雅

松坂パーク 屋上
日本一の完備した施設

松坂屋
大阪日本橋
電南 1171

避妊には…
ゼリー剤を！

★溶ける時間がいらず速効且つ確実で連用しても無害
★注入器で深部へ送るか、タンポンに塗り御使用を！

サンシーゼリー

山之内　1姫 2太郎 3サンシー

円四料送　圓拾四價定　誌雑柳川　號八〇三第